足のうら怪談全

庵堂ちふう

目次

＜目次＞

『足のうら怪談 魚の目』より
１、お先に失礼
２、幽霊屋敷
３、怪奇巨乳娘夢なら覚めないで
４、あわいの町
５、髭オヤジ
６、校庭の木
７、幽霊ＶＳプレデター
８、バスツアー
９、手斧
１０、人類から遠く離れて
１１、水
１２、Ｘ氏の実験
１３、幽霊予報
１４、カラスの住処

『足のうら怪談 土踏まず』より
１５、殺人怪談
１６、小名木川沿いを走る
１７、マイ・オールド・フレイム
１８、墓地に住む
１９、我輩はゾンビである
２０、深川江戸資料館にて
２１、対岸の空き部屋
２２、何が見えるの
２３、泥鰌掬い
２４、捕獲
２５、深川の雪男
２６、愛犬バズ公
２７、門前仲町駅前自転車置場奇譚
２８、波間／滋春のこと
２９、波間／深羽子のこと
３０、波間／孟洋のこと

３１、深川の文士先生
３２、階段の死闘
３３、ぼくの家族は、いい家族（＊特別収録作）

『足のうら怪談メラノーマ』より
３４、見える人は実在するっ！　の巻
３５、森の中であ
３６、pop.0001
３７、持たざるものたち
３８、エスカレーター
３９、みんな死ぬまで
４０、カフェラテ
４１、腫れ物
４２、みちのくストリップティーズ（long ver.）
４３、迷妄母娘

・収録されているすべての作品より長くなってしまうという、異例の事態が勃発しているあとがき

・初出一覧

お先に失礼

今西は絶好の覗きポイントを見つけた。
しかし、そこは例のなんだかいやぁな感じのする場所でもあった。
幼い頃からの度重なる経験で、今西はそうしたなんだかいやぁな感じのする場所に出くわしたとき、すぐに立ち去るようにしていた。そして、何があろうと二度とそこへは近付かず、どうせ分かってもらえないからと理由を説明することもしなかった。
このときばかりは男女混合卒業旅行という色っぽい行事のせいで気が弛んでしまっていたにちがいない。うっかり口を滑らせてしまったときにはもう遅かった。ヒッキーもジンちゃんも武井も「行こうぜ行こうぜ」とやたら盛り上がった。
「芳野たち、風呂行ったぞ！」
偵察から戻った水嶋が興奮を抑えきれない様子で言うと、一座は大きくどよめいた。
芳野めぐる。プロフィール、Ｆカップ。
いかん、我慢できない。それに自分だけが同行しないのもおかしい。今西は浮き足立って進む一行の最後尾についた。
「そこの崖みたいになってるところを上がるんだ」
露天風呂の垣根の向こうにある杉林の暗闇の中で、今西は声をひそめて言った。
ヒッキー、水嶋、ジンちゃん、武井の順で、高さおよそ三メートル、角度七十度ほどの急斜面を、岩やむき出しになった木の根をうまく利用してよじ登った。
いざ自分もと、今西が進み出たそのとき、
「お先に失礼」
と、脇からすっと男が現れた。
その瞬間、全身が総毛立って動けなくなった。
男は今西が立ちすくんでいるうちに斜面を上がって行った。体のどこに力を入れる様子もなくすいすい登るその姿は、とても人間技とは思えなかった。
今のは……。
漠たる不安をようやく押さえつけて、今西は恐る恐る高台に上がった。
友人四人と先ほどの男が、それぞれ木の後ろに身を隠して露天風呂を覗き込んでいた。
「やべぇ、ちょーやべぇ」
ジンちゃんが誰にともなく言う。
よく見ると、みんな手を股間にやって小刻みに動かしていた。
その男でさえ、そうしているではないか。
友人たちは夢中で、その男に気づきもしなかった。
「そいつ、人間じゃないぞ」
今西は思ったが、声には出さなかった。
いや、出せなかった。

幽霊屋敷

　通常のテーマパークにある幽霊屋敷には、何かが欠けているとずっと考えてきた。それが何なのか、あるときついに分かった。必要なのは本物だ。オレは理想の幽霊屋敷を実現するため、さっそく動き出した。
　それが数年前の話。土地の当てはあった。資金も何とか都合がつく。あれこれ煩雑な交渉や書類仕事も慣れたものだ。唯一にして最も厄介な問題は、いかにして本物の幽霊を連れてくるか、これだ。
　オレが探したのは、死んでもかまわないという連中だった。
　ただでとは言わない。相応の金銭と引き替えならばという意味だ。金に困っている連中は少なくない。まともに働いていたのではとても返せないほどの負債を抱えた、崖っぷちの連中だ。自分の命と換えてでも家族だけは助けたいなどと思っている、どん詰まりの連中。オレはそこに目をつけた。
　ネット広告に釣られてきた奴一人ひとりとじっくり交渉し、事件や事故に見せかけて死んでもらうことで多額の保険金を引き出す計画を話した。決まり文句は「諸々の面倒はうちが引き受ける。あなたはただ死んでくれればいい」だ。
　契約にサインした者たちをオレは順々に始末した。
　双方納得済みなのだし、もっと楽に行くかと思ったが、いざとなると案外誰もが抗った。今わの際でも大いに苦しんだ。だが、それはそれ、仕方ない。むしろ、それくらいの方がいい結果を生むかもしれない。
　オレはその都度屋敷に遺体を運び込み、それぞれの部屋に放置した。山奥の古い洋館を安く買い取り、それらしく改築を済ませていた。ちょっと気長な話になるが、あとはこいつらが化けて出るのを待つというわけだ。他にいい方法がなさそうなんだから仕方ない。うまくいかなければ、また別の奴を始末して投げ込むだけだ。
　保険金の支払い？　契約？　忘れてくれ。奴らはもう死んだんだから。死んだらおしまい。何も確かめようがない。そうだろ？
　運良く二、三ヶ月のうちにいくつかの部屋で奴らが化けて出るようになった。やり方はそう悪くなかったらしい。この調子なら、次の夏にはオレの理想の幽霊屋敷がオープンできそうだ。連中の中には色々恨みがましいことを言ってくる奴もいるが、耳は貸さない。死んでまでこの世のことにこだわるとは理解しがたい連中だ。楽にしろよ。お客を楽しませてくれなきゃ困るんだ。
　さて、準備万端整った。開園だ。

怪奇巨乳娘 夢なら覚めないで

駆け出しのアイドルＩが亡くなった。窒息死であった。巨乳を売りにしていたＩである。寝ているときに自分の乳が喉元に垂れてきて、それに呼吸を止められたのだった。所属事務所は詳しい事情を明らかにしなかった。

高野夫妻は結婚七年目、ようやく子供にも恵まれ円満な家庭生活を送っていた。そんなある日、妻の美紗子は夫の研治がひどくやつれていることに出し抜けに気がついた。頬がこけ、目の下には隈が濃い。まったく急な変化だった。

心配する美紗子に、研治は「ちょっと寝不足なだけ」とぶっきら棒に答えた。同じ時間に布団に入ってるし、子供が夜泣きしても起きないくせに、睡眠不足？　美紗子は妙に思ったが何も言わなかった。こっそり顔を伺うと、研治はなぜかニヤついているように見えた。

仕事は毎日ちゃんと行っているらしかった。多少残業することがあっても、家には真っ直ぐ帰ってくる。陰で携帯をいじっている様子もない。もちろん夜だって毎晩ぐっすり眠っているし、こっそり布団から抜け出してるような気配も微塵もない。それでも美紗子は、研治がよそに女を作ったのではないかと考えずにはいられなかった。

疑惑に眠れぬ夜を幾晩か過ごしたある深夜、浅い眠りにあった美紗子は夫の苦しげな唸り声に目を覚まされた。ところが、どうしたのかと起き上がろうとすると、金縛りにあったように身体がぴくりとも動かなかった。そんな経験は初めてだった。研治の切迫したうめき声が聞こえた。すぐ隣で何か異常事態が起きているようだった。

美紗子は必死になってそちらを向こうとして、何とか横目に夫の姿を捉えた。研治の上に若い巨乳の女が馬乗りにのしかかっていた。前のめりになった女は、その巨大な乳を研治の顔にぐりぐりぐりぐり押しつけていた。「うぅ」「あぁ」研治の声は、むしろ喜びに悶えているように聞こえた。美紗子に殺意が沸いた。

ふいに身体の自由がきくようになって、美紗子は布団から跳ね起きた。と同時に、巨乳女も身体を起こして美紗子の方にすうっと向き直った。美紗子はぎくりとなって、また動けなくなった。ずいぶん長い時間に感じた。巨乳女は、美紗子の肌蹴た胸元を一瞥すると意味ありげにふふっと笑って、そのまま幻のように消えてしまった。美紗子は己の貧乳を笑われた気がした。

再び自由を取り戻した美紗子は、研治を蹴り起こした。素敵な夢から覚まされた風の研治の襟元を掴み、巨乳女のことを問い詰めた。ところが、研治は何も知らない、何のことか分からないとシラを切ったのだった。屈辱にも程があった。

それから数ヶ月のうち、東京都内で睡眠中に謎の窒息死を遂げる怪死事件が相次いだ。被害者はいずれも男性。どのケースも、まるで何かとても柔らかいものに顔を挟まれていたかのようなニンマリした死に顔だという。高野夫妻は間もなく離婚したという話が伝わっている。少なくとも研治は死なずに済んだ。

あわいの町

　目指す場所もないまま電車を乗り継いで、女は東北のある小さな町まで来た。すべてを捨てて逃げてきたのだ。
　名前を聞いたこともないその町を当てもなく歩いていると、ある家の縁側の窓がわずかに開いているのを見つけた。なぜか招かれているような気になって、女はその家にするりと上がり込んだ。
　つい今しがたまで人がいたような気配があったが、無人だった。テーブルにまだ温かいお茶が出ていて、まるで人が来るのを待っていたかのようだった。
　女はじっと座り込んで家の者の帰りを待った。対面してどうするつもりなのか、自分でも分かっていたわけではなかった。ところが、いつまで経っても誰も帰ってこなかった。次の日も、その次の日も誰も帰らず、女はそのままその家に居ついてしまった。
　周囲の誰も女を不審がらなかった。まもなく、近くの温泉施設に仕事を見つけ、中古車を安く手に入れた。少しの間、女は静かに慎ましく暮らした。
　その町に来て一年が過ぎた頃から、女は職場の若い男と関係を持つようになった。時折ひりひりするほどの焦燥感を見せる男だった。お互い相手に何か先の約束を迫るような付き合いではなかった。ただ一緒にいると虚しい気持ちが紛れることもある。それだけだった。それでも、女は男を家に上げようとは決してしなかった。その家は、女だけの居場所だった。
　ある日、男が職場の売り上げを持ち逃げした。女は何も知らなかった。男との関係を問い詰められ、職場に居づらくなった。仕事を辞め、車も置いて、消えるようにその土地を離れた。
　あちこち寄り道をしたが、長居できる場所は見つからなかった。結局、女は捨てたはずの場所に戻った。そこには、少し老けた夫が待っていた。
　それからしばらく、平穏な日が続いた。女は家を出ている間のことは何も話さなかったし、夫も何も聞かなかった。
　ある年の秋、夫の提案で夫婦は東北へ旅行することになった。
　車での旅行だった。ある山道を走っているとき、女は短い間暮らしたあの町がそう離れていないところにあると気がついた。そう思うと、もう一度あの家を見たくてたまらなくなった。あの家に、何かひどく大切なものを忘れてきたような気がした。
　女は、車を運転する夫にその町まで行くように頼んだ。妙に思った夫だったが、すぐに察して黙って車を走らせた。
　職場だった温泉施設への行き来にいつも使っていた道に乗って、女はあの家を目指した。ところが、ここを曲がればもうすぐという角を曲がった先に、まるで見覚えのない光景が広がっていた。あの家はどこにもなく、女は道を見失った。もう一度引き返してきて、別の方角から近づいた。ところが、やはり途中の角を曲がったところで見知らぬ住宅地に紛れ込んでしまった。いくら探してもあの家は見つからなかった。
　道端に以前顔見知りだったある婦人を見かけ、女は車を停めて声をかけた。しかし、その婦人

は女のことなど知らないと言うばかりだった。

髭オヤジ

　また死んだ、クソッ。
　今日も朝からゲーム。最近ハマってるのは、口髭を生やしたオヤジキャラが活躍する人気アクションゲームのシリーズ最新作。第一作からすべてやってきているが、今回はやけに難易度が高くてなかなか攻略できない。死ぬたびに頭に来てコントローラーを床に叩きつける。
　プレイヤーが死ぬと、ポテッと横たわったキャラクターの体から魂がひゅうと抜け出る。羽が生え、頭に光る輪っかを浮かべた、向こうが透けて見える髭オヤジ。魂は天に召されるようにゆらゆら浮き上がって、画面上方へと消えていく。シリーズ全作でお馴染みの光景だ。
　中盤に、土管から人食い花モンスターが突如飛び出してくる難所がある。
　やたらすばしこい亀がせっせと吐き出す火炎をかいくぐりながら、穴ボコだらけの足元に気を取られて進んでくるため、どうしても人食い花モンスターが回避できない。
　そしてまた死んだ、クソッ！
　何度やられたか数え切れないくらい死に倒したそのとき、別の展開になった。
　髭オヤジの魂が画面上方に消えていったかと思うと、デジタル映像と三次元世界の狭間をどうにかしてかいくぐり、こちらの世界へ浮き上がってきたのだ。
　呆気に取られていると、髭オヤジの魂はふわふわと近づいてきて、不敵な表情を浮かべながらオレにまといついた。こちらを横目に見て、ふわふわふわふわ、じっとしない。
　気味が悪くなって、まるでハエを追い払うみたいに髭オヤジを手で払った。しかし、あちらもまるでハエみたいに、こちらの手をことごとくかわす。スルッ、スルッ。
　カチンときて、手近に転がっていたコミックを掴み、手当たり次第に投げつける。掠りもしない。閃きに襲われ、ゲームの電源を切る。これで勝利とばかりにへっと見やると、奴は変わらずふわふわ浮かんでいる。オレを蔑んだその目つき。とうとうキレて、手刀の嵐をお見舞いするが、一発も当たらない。
　息を切らすオレ、汗もかかずに浮かぶ髭オヤジ。こいつはオレに取り憑いたのだ。
　それからが不幸のはじまりだった。
　財布落とす。携帯なくす。ゲーム機壊れる。階段を転げ落ちて二箇所骨折。ケーキに当たって食中毒。祖父二人が相次いで死亡。大学の同級生がバイク事故。従兄弟の家、炎上。姉貴、流産。実家がつまらない詐欺に引っかかる。母親、倒れる。
　こちらも黙っていたわけではない。しかし、たまに不意打ちを仕掛けてもことごとく回避された。水やら熱やらを浴びせてみるとか、電磁波を浴びせてみるとか、お守りを身につけてみるとか、何をやっても効果なし。その度にやつは「おいおい、まだ分からないのかよ」とでも言いたげな目つきでオレを見る。イライラする。
　いつのまにか、髭オヤジが主役を張るシリーズすべてに共通する例の有名なテーマ音楽が、頭の中でひっきりなしに鳴るようになった。止めようと思っても止められない。
　それから、頭が割れんばかりの激しい頭痛が発作的に起こるようになった。頭痛が起こる間隔

は次第に狭まっていき、やがて頭が痛くないときでも何も考えられずにぼーっとするばかりになった。その間も髭オヤジはずっとふわふわ浮かんでいた。
　あるとき、髭オヤジが耳元で呻くように言った。
「一体何回お前に殺られたことか」
　それとも、そんな声が聞こえただけかもしれない。

校庭の木

　私が通っていた小学校には、校庭の真ん中に樹齢二百年と言われる銀杏の大木があった。
　ある放課後、私と同級生のＭは、担任から校舎裏にある菜園の草むしりを命じられた。何かの罰だったはずだが、理由は忘れてしまった。喋ったりふざけたりしながら働いて、日が暮れてきた頃になってようやく担任がもう帰っていいと声を掛けに来た。ずいぶん遅い時間になっていた。今思うと、担任は言いつけたきり忘れてしまっていたのかもしれない。
　私とＭは、道具を片付けて手足についた泥を洗い落とすと、教室に鞄を取りに戻った。二人の足音が廊下にぺたぺたと響いた。職員室の先生たちを除いて、校舎には誰一人残っていなかった。
　Ｍがトイレに寄ると言うので、私は先に校舎を出て待つことにした。ぼんやり夕焼けを見ながら、銀杏の木まで歩いたのを覚えている。ちょうど、下駄箱と校門の中間にその木があったのだ。木の下で、私は地面の小石を靴先で蹴ってみたり、落ち葉を拾って弄んだりしてＭを待った。
　ふと、上の方でカサカサと葉の擦れ合う音がした。上を見るより早く、私の傍らに何かが落ちてきた。銀杏の実だろうかと見てみると、一本のシャーペンだった。怖いとか恐ろしいという感じはなかった。ただ不思議に思って見つめていると、またすぐ後ろに何かが落ちる音がした。今度はプラスチックの１２センチ物差しだった。
　私は思わず上を見上げた。一瞬、何かいるように見えた。しかし、枝や葉に邪魔されて、よく見えなかった。幹に寄ってみたり、少し離れてみたりして、目を凝らした。
　すると、高く伸びた幹の中ほどに、何か妙なものが張りついているのを見つけた。肌が樹皮の色に似ていて見分けがたかったが、どうも生き物らしい。呼吸のたびに腹が少し膨らんでいた。人ほどにも大きな爬虫類、いや、爬虫類のような人間だろうか。頭を下にしてじっと動かない。
　やがて、その生き物がうっすらと目を開いた。私の方を見たわけではなかったが、視線を感じたのだろう。生き物は急に身を翻すと、長い胴体をくねらせてトカゲのような動きでざざざざっと幹を這い登っていった。その姿はすぐ見えなくなってしまった。
　Ｍが来るまで、私は呆然となったまま木を見上げていた。何だろうとつられて上を見上げるＭに、私は今見たもののことは何も言わなかった。それから、私はその木のそばをなるべく通らないようになった。

幽霊ＶＳプレデター

　ある夏の晩。
　北関東の寂れた町の外れにある廃墟付近に、宇宙の彼方から一体の血気盛んな若いプレデターが飛来した。惑星の仲間に内緒で、一人こっそり狩りを楽しむ目的だった。
　地球と呼ばれるこの惑星に関する情報は多くなかったが、戦闘力の高い生物はほとんどいないという。狩り慣れしていない若いプレデターにはもってこいの場所に思われた。あるいは、やりたい放題したい者にも。ケケケケケ。
　彼は、手はじめに近くの廃墟から調べた。あっという間にネズミやノラ猫といった小動物を数十匹仕留めたが、それではとてもじゃないが物足りない。彼が探していたのは、人間という生物。正確なデータはなかったが、二足歩行で、身長はおよそ１５０～１８０センチメートル、体重はおよそ５０～８０キログラムの生物だという。
　この惑星の支配的存在だというその人間という生物は、多少狩り甲斐があると噂だった。武器を手に反撃してくる人間もいれば、ピーピー泣き叫んで逃げ惑うだけの人間もいるという。彼にとっては、そのどちらを仕留めるのも快感だった。
　しかし、彼はその人間が見捨てた場所こそ廃墟と呼ばれるということをまだ知らなかった。それも無理のないことだった。
　いくら探しても人間が見当たらないので、彼は場所を変えようとした。そのときだった。彼は背後に何か気配を感じた。ハンターの直感が身体を勝手に緊張させた。彼はさっと後ろを振り返ると、サーモグラフィーに切り換えて辺りを見回した。ところが、体温を持った生物はどこにも見当たらなかった。物陰にも何も潜んでいない。ヘンだな。彼は思った。
　引っかかるものを感じて、彼はまだチェックしていなかった地下も調べることにした。
　階段近くの部屋から、奥へと順々に調べていった。何も見つけられないまま一番奥の倉庫の前へ来ると、彼は錆びた扉を一思いに蹴破った。しかし、中にはまたネズミがチョロチョロと這っているだけだった。チッ。
　さっきの気配は気のせいだったかと、彼はその場を引き払おうとした。
　そのとき、彼はまた背後に何かの気配を感じて、身体を強張らせた。
　今度こそ、明らかに何かが彼の背後を取っていた。これまでただの一度もこんなにたやすく背後を取られたことがない彼だった。屈辱を味わいながらも、彼は焦ることなく相手をじっくり引き寄せた。そして、相手が十分に距離を詰めてきたところで、腕に仕込んだ鋭い短刀で振り返りざまに斬りつけた。これで一丁上がり。ケッケッケ。
　ところが、手応えはなかった。そのため刃は虚しく空を切り、勢い余って彼は己の逆の腕を斬りつけることとなった。
「キィィィィィ～！」
　彼の腕から、緑の蛍光色の血が噴き出した。
　彼は自分の血を見るのが好きではなかった。それですっかり頭に血が上り、肩に装着したプラ

ズマキャノンで辺りかまわず撃ちまくった。許サネェ、死ネ死ネ死ネ！
　しかし、手応えはまったく感じられなかった。どうも一階へ逃げて行ったらしい。なんてすばしっこい野郎だ。彼は急いであとを追った。絶対殺してやる。
　いる。そいつがまだ建物の中にいるのが、ハンターの勘で分かった。と同時に、彼は怒りに打ち震えた。そいつはやる気なのだ。ここで、このオレと。オレ様と。
　これが人間だというなら、最初から人間最強の相手にぶつかったのかもしれない。相手に不足はない。首を取って惑星の仲間に見せびらかしてやる。彼は考えた。
　臨戦態勢になってそいつの姿を探した。全身の神経を尖らせ、慎重に歩を進めた。どこにも隙がなかった。こうなってしまったプレデターを相手にするのは非常に厄介だと、宇宙では広く知られていた。
　ところが、彼はまたしても、いともたやすく後ろを取られたのだった。
　後ろから首を絞められ、彼は呼吸にあえいだ。しかも、彼の怪力をもってしてもそれから抜け出すことができなかった。そんなバカな。彼は何よりも精神的に大きなダメージを受けた。
　思い切り身体を捩じらせて、彼は何とか脱出した。その拍子に、装着していたヘルメットが弾け飛んだ。蟹を思わせる奇怪な口を持った醜い素顔を不本意にさらすこととなった彼は、そのとき初めて自分自身の目でそいつの姿を正面に捉えたのだ。
　それは人間という生物に極めて似ていた。ぼんやりと突っ立って、身長は１５０～１８０、体重は５０～８０。そんなところだろう。だが、どこかが違う。そいつは、輪郭がぼやけていて、実在感がひどく乏しかった。まるで影みたいだった。他のどの惑星でもこんな種類の生き物は見たことがなかった。これは、人間と呼ばれる生き物なのか？　その仲間なのか？
　彼は首根っこを掴まれ、二メートルを越す巨体を軽々と放り投げられた。壁にぶち当たり、崩れたコンクリに埋もれた。何とか起き上がると、すぐまたそいつが迫ってきた。彼は再び肩のプラズマキャノンをお見舞いした。今度こそ確実に捉えた。そう思った。しかし、プラズマ弾はそいつをすり抜けてしまった。
　彼はそいつにいいように殴られた。殴られたのだと思うが、具体的に何をされているのか分からなかった。重い打撃をあちこちに食らった。すべてが彼の理解を超えていた。一方的にやられながら、彼はどうやら勝てないらしいと悟った。
　同時に、だがしかし、と考えた。こんな最果てのちゃちな惑星まで来て、おめおめと負けて帰るなんて考えられない。このままただで引き下がるわけには絶対にいかなかった。彼にもまた戦闘民族プレデターとしての誇りがあった。
　腹に強烈な一撃を食らって吹き飛び、彼は地下へ下りる階段を転がり落ちた。頭を強く打って気を失いそうになったが、何とか持ちこたえた。そして、腕のタッチパネルを開くと、震える長い爪で何とか操作した。そいつが地下に下りてくるのが分かった。彼はあるプログラムをセットすると、傍らに立ったそいつに向かって不気味に笑い出した。ケ、ケ、ケケケのケ。
　笑い続ける彼の傍らで、そいつはただぼんやり立っていた。
　数十秒後、プレデターの自爆によって、周囲の半径約一キロメートルが廃墟もろとも跡形もなく吹き飛んだ。しかし、それも結局、そいつには何のダメージを与えることもできなかった。

バスツアー

　変ね、また一人多い。
　添乗員の真央は、秋の陸奥バスツアーに団体で申し込んできた２２人のはずの爺さんたちを数え直した。２３人いる。もう五年もやっている仕事だ。数字にも強い。確かに年寄り相手に言うことを聞かせるのは難しいが、ただの点呼でそう何度も数え間違えるはずがない。なのに、また２３人だ。これで三度目。前回も前々回も、みんなで数え直してみたらちゃんと２２人だった。
　爺さんたちは互いに顔を見合わせた。全員町内会の顔見知りだという。「全員だよ」「みんないる」「いるいる、全員」爺さんたちは口々に言うと煩わしいのはゴメンだとばかりに、それそれと真央をバスの中に押し込んだ。
「ちょっと！」どさくさにまぎれて腰まわりや尻を触られた真央は、思わず声を荒げた。しかし、席に着いた爺さんたちを睨みつけてもう一度数えてみると、今度は２２人なのだ。真央は狐につままれたような思いだった。
　バスは山道の下りに差し掛かっていた。遠くの山間に湖が見えるカーブで車体が傾いて、あっと思ったときにはガードレールを突き破っていた。落下したバスは、頭を下にした状態で何とか木に引っかかって止まった。
　真央と２２人の爺さんたちは、バスの底で揉みくちゃになった。いや、真央一人が爺さんたちに揉みくちゃにされていた。爺さんとは思えない力で押さえつけられて、少しも動けなかった。いやらしい手や指や舌が、これが生涯最後のチャンスとばかりに切羽詰った様子で真央の体中を這いずり回った。あちこちがぬめって、ひどい不快感があった。落下の衝撃で頭がずきずきと痛んだ。
　ふと、襲い掛かってくる爺さんたちの中に、死んでいる者が何人かいることに気がついた。爺さんたちは、死してなお真央の女の部分を目指してくるのだった。ぞっとしたが、されるがままになるしかなかった。うぅ、はぅ。爺さんたちの唸り声が、地獄と化した宙ぶらりのバスに充満した。
　真央ははたと目を覚ました。バスは山道を下りはじめ、遠くの山間に湖が見えるカーブに差し掛かるところだった。あっと思って横を見ると、運転手がうつらうつらしていた。咄嗟に声をあげようとした瞬間、後ろから爺さんの一人が真央の肩を掴んで言った。
「なんか一人多いみたい」

手斧

地面に転がり落ちていた地蔵の首を足蹴にしたら、下から蛇が這い出てきた。それを見たとき、和樹はどうしてもやらなければと思った。

家に帰ると、和樹は今や誰も近寄ることのなくなっていた離れの物置の戸を開けた。破れた壁板の隙間から、隅で埃を被っていた手斧に一条の光が射していた。亡くなった祖父が、裏庭で伸び放題になった蔦や木の枝を断ち切るのに使っていた手斧だった。

和樹は、荒々しく斧を振るう祖父の後姿をおぼろげに覚えていた。どこか近寄りがたいところのある人だった。しかし、まだ小学生だった自分に祖父が無理やり刃の研ぎ方を手解きしてくれたのも、このときに備えてのことだったのだと今の和樹には思えた。

父が一階の部屋にいる気配があった。腹を空かせた妹の希海にスナック菓子を与えると、和樹は二階の自室にこもった。こっそり持ち込んだ道具で、慎重に刃を研ぎはじめた。無心だった。

母が半年前に家を出て以来、二人の妹の面倒は和樹が見ていた。希海はまだ二才。葉月は中学に上がったばかりだった。しかし、自身も高校に上がったばかりの和樹に、何ができるわけでもない。食事はすべて弁当で済ませるようになり、雨戸は締め切りになった。台所にはゴミ袋が積み重なった。

父は何もしてくれなかった。必要なだけの金はくれた。しかし、それだけだった。それ以上何か言えば、生意気だと決めつけられて殴る蹴るされた。祖父の血を継いで大柄な体格の父に対し、和樹はどちらかといえば貧弱な体つきだった。もう高校生とはいえ、力ではとてもかなわなかった。

和樹は父と顔を合わせるのがいやなために、もらった金はなるべく長くもたせようとした。しかし、金はいつもすぐ底をついた。それでも、父の機嫌の悪いときに言えば、散々暴力を振るわれたあとでなければ金はもらえなかった。

父は、母がいなくなるしばらく前から仕事に行かなくなっていた。最初は別の仕事を探している様子もあったが、今ではそんな素振りさえ見せなくなっていた。

母がいなくなってから、父は家を出たきり何日も帰ってこないことが度々あった。そんなとき、和樹はこの家から逃げようと何度となく葉月に持ちかけた。しかし、その度に葉月は死んだような目で兄を見返すだけだった。

近頃では、葉月は学校から帰るとほとんど父の部屋から出てこなくなっていた。和樹は妹がそこで何をされているのか、今やはっきりと分かっていた。だからこそ逃げようと言うのだった。それなのに、なぜ葉月がその気にならないのか和樹には理解できなかった。かといって希海を連れて自分だけ逃げることもできず、和樹はただ己の無力さを思い知らされた。

母は何も告げずに突然いなくなった。しかし、父が働かないことだけが原因ではないことは、和樹にもそれとなく理解できた。土地の名家の出で、プライドが高くひどく体面を気にする父方の親族を、母は昔からひどく嫌っていた。母が祖父や近くに住む親戚たちを口悪く言うところを、和樹は子供の頃から繰り返し見ていた。

母の抱えていた憎悪を思いながら刃を研いでいるとき、和樹は、祖父が庭で手斧を振るっていると、母が決まって縁側でそれを見ていたことをはたと思い出した。そんなとき、母はいつも祖父の背をすごい形相で睨みつけていた。そして、その母の傍らに自分はいたのだった。

これが何を意味するのか、和樹の中で一つに結びつきそうで結びつかなかった。考えようとすると、こめかみの辺りで血がどくどくと脈打ちはじめた。無理をして考えれば、頭が膨れ上がって破裂するのではないかという不安に駆られた。その記憶はただ重苦しい塊となって和樹の頭の中につかえ、むしろ混乱さえ招いた。

刃を研ぎ終わると、和樹はぼんやりして何も考えられなくなっていた。

いつの間にか部屋に入ってきていた希海が、学校鞄をいじっていた。和樹はしばらく黙ってそれを見ていた。やがて、鞄の留め金がはずれ、希海が中身をすべて床に空けてしまった。中から、その日返却された答案用紙がいくつか出てきた。それは高校で初めての試験で、点数はどれも一桁だった。和樹は授業にまったくついていけなくなっていた。

赤書きされた数字を希海が嬉しそうに読み上げるのを見て、和樹は急に小さい妹が哀れになった。思わず涙が出るのをこらえて、和樹は希海の後ろからそっと近づいた。そして、そのか細い首を一思いに絞めた。苦しそうに手足をばたつかせる希海は、悲しいほど非力だった。希海の身体はすぐに何の抵抗も示さなくなった。

和樹はぐったりとなってベッドに身を投げた。それから、机の上で鈍い光を放つ手斧を見た。その刃は、申し分ないほどの切れ味を取り戻していた。手を伸ばして指先をそっと刃に当てると、少し引いてみた。皮膚が切れ、血が滲んできた。傷口を見ているうちに、やがて痛みが襲ってきた。和樹はその血を嘗めた。

重苦しい何かが頭の中で膨らんで、和樹はベッドの上で身もだえした。何度も寝返りを打ち、頭を抱え込んでうずくまっていると、やがていったん収まった。しかし、消えはしなかった。もうこれが消えることはないのだと和樹は思った。

どうすればいいのか分からなかった。全身の力を使い果たしてしまったようになって、和樹はただぼんやり天井を見つめた。そのうち浅い眠りに落ちた。

次に目を覚ましたとき、家の中は息をするのもためらわれるほどの静けさに包まれていた。葉月はとっくに学校から帰っている時間だった。今、階下で何が行われているのか、和樹にははっきりと分かった。

やらなければならなかった。和樹は手斧をつかむと、そっと部屋のドアを開けた。そして、息を詰めて階段を下りていった。

人類から遠く離れて

　人類が滅亡してから早くも一万年が過ぎようとしている。あまり確かな数字とはいえないかもしれないが、まぁ十万年だろうと同じことだ。
　今でも私は思い出す。人類最後の一人となった男を恨めしんでやろうと、彼の人の枕元まで急いだあの日を。途中、大勢の同業者に会った。誰もが持ち場を離れて、現場へ急行していた。しかし、その努力が徒労に終わると分かっていない者はいなかった。なにしろ現場はブエノスアイレスだったのだから。
　日本にいた私にとって、それはほとんど地球の裏側だった。おまけに西周りで行ってしまったのだ。そうすれば大西洋を越えざるをえない。我々にとって海を越えることほど難しい注文はないというのに。
　シルクロードの途中で道を誤り、散々迷った挙句ようやくロシアの大地に抜け出た頃、人類最後の一人が絶命したという報せが伝わってきた。
　こうして私は最後のチャンスを逃したのだ。
　報せを聞くと、誰もがむっつり黙り込んだ。そうでなくともむっつりしがちな連中ではあるが。我々は職を失った。フィナーレをどういう恨めしみ方で決めてやろうかと、あれこれ考えたことも無駄に終わった。もともと私の恨めしみ方のバリエーションは少ないのだが。「わっ！」とか、「ずーん」とか。
　人類がいなくなってからしばらく、私はすっかり途方に暮れていた。
　あるとき、ふとひらめいて、手近な他の生き物を恨めしんでみることにした。ものは試しだ。犬に、馬に、ハエに、ザリガニに、蚊に、豚に、「わっ！」と。
　まるで相手にされなかった。
　自棄を起こして、生き物でないものまでも恨めしんでみた。崩れた壁に、生い茂った草花に、石ころやプラスチック容器に、打ち棄てられた自動車に、「ずーん」と。
　ひどく疲れただけだった。
　私はただ人類を恨めしんでやるしか能がなかったのだろうか。どうやらそう認めざるをえないようだ。
　もう何もやることがない。
　この先ずっとそうなんだろうか、何万年も。
　気が重い。

水

「朝、店に来ると、床が水浸しになってるんです」
　国分寺のとある蕎麦屋の店長Ｓはそう語った。
　最初は空調設備の故障かと疑ったが、小さな水溜りが床のあちこちに点在していることを考えると違うらしい。水道管も調べてみたが、ひび割れなどは見つからなかった。営業中は何も起こらないし、特に害になることもないからしばらく放っておいた。どうせ開店前にモップがけをするのだから、その水をそのまま使ってしまえばよかった。
　しかし、度々そんな現象が起こると、やはり次第に気味悪くなってきた。
　店長Ｓが改めて原因を考えてみたところ、昨年の夏、短い間だったがその店で給仕のアルバイトをしていた女性Ｙの存在が思い当たったという。
　Ｙは近くの大学に通う一人暮らしの学生で、上京したての一年生だった。アルバイトをするのも初めてという話だったが、かわいらしい容姿で困るとハの字になる眉がなんとも愛嬌があり、店の看板娘にと採用した。
　ところが、もともと緊張しやすい性格だったこともあって、Ｙは毎回のように何らかの失敗をしたという。料理を別の客に運んでしまったり、丼を割ってしまったり。あるいは、注文を忘れてしまったり、お釣りの計算を間違えたり。一つ一つは誰もが経験するような取るに足らない失敗だったが、それが日常的に起きた。
　中でも困るのが、しょっちゅう足をもつれさせて転ぶことだった。
　特に、来店した客に水とおしぼりを出すとき、Ｙはよく転んだ。接客の最初ということで、必要以上に硬くなるらしい。「あっ」とか「きゃっ」というＹの小さな叫び声が、厨房にもしばしば届いたという。
　まだ学生だったこともあるし、持ち前のルックスと相まって、失敗はむしろ微笑ましくさえあった。また、そんな彼女を目当てに来店する客も実際いたので、やがて慣れるだろうと店長Ｓも大目に見ていた。
　しかし、客に水を引っ掛けてしまうことも何度か起こり、あるときついに被害を受けた客から大目玉を食らうこととなった。相手は近くのビルに入っているある企業の上役で、いつも些細なことに難癖をつけてくる年配の男性だった。その会社の社員には他にも数名の常連がいたこともあり、店長Ｓとしてもトラブルは避けたかった。それに、悪いのは確かに水をかけてしまった店側だった。
　Ｙと店長Ｓの二人で必死になって頭を下げ、クリーニング代を包んでその場はなんとか怒りを静めてもらった。店長Ｓも、これを機にＹには厨房や洗い場を中心にやってもらうことにしようと決めた。
　ところが、その件がよっぽどこたえたのか、Ｙは翌日のアルバイトを無断欠勤した。それから三日無断欠勤が続き、ついには連絡が付かなくなった。辞めたと判断するより仕方がなかった。
　それから数週間後、店長ＳはＹがアパートで自殺したという話を耳にすることになるのである

。
「いくら繊細だと言っても、お店でのことが原因で自殺までするなんて考えられません。だから、他に何か悩んでいたことがあったんだろうと思っていました。しかし、最近店で起きていることを思うと……」
　店長Ｓは言葉を濁した。

　客の少ない時間帯に表からその蕎麦屋を観察していると、客に水を出しに行こうとするＹらしき女性の姿が、窓ガラス越しにうっすら透けて見えるのだという。

　彼女ではないはずだ。
　なぜなら、化けては出ないと誓わせたのだから。
　彼女をさらって自宅の地下室に監禁した私は、以後八ヶ月の長きに渡ってじわじわと苦しめ続けた。理由も言わず、相手の言うことに耳も貸さず、ただひたすら私に対する憎しみを掻き立てようと責め苛んだ。どんなささやかな抵抗も握りつぶし、あらゆる背徳行為を仕掛けた。
　彼女自身を傷つけ苦しめるだけではない。友人、ペット、恋人、家族。あるいは名誉や肩書き。彼女の大事なものはすべて踏みにじり、奪い去った。肉体と精神の双方を打ちのめす、終わりのない苦痛。
　彼女にとってはまったく身に覚えのない仕打ちだったし、私にしても必ずしも彼女でなければいけなかったわけではない。納得のいく説明はどこにもない。ただ私の好奇心によるものだという以外には。
　いきなり死なせるわけにはいかなかった。まずは手足の指を一本ずつ潰し、頭の毛を抜いていき、歯を折った。面白がるようにして、食用豚が焼き付けられる焼印を生肌のあちこちに押し付けた。
　彼女が少しずつ弱り、逃げ出すのを諦めた頃から、私は彼女に誓いを立てるように命じた。死んでも化けては出ない、という誓いだ。なぜそんなことを誓わされるのか、彼女は理解できなかったに違いない。彼女にしてみれば、それも私から与えられる理不尽な苦痛の一つにしか思えなかっただろう。
　やがて、拷問の最中にそれを誓うよう迫るたび、彼女は疑問を抱くようになった。なぜそんな誓いを立てる必要があるのか。化けて出るなとはどういう意味か。
　もちろん私は何も答えない。それどころか、私はやがて彼女に喋ることをも禁じた。唯一「化けては出ません」と誓う言葉のみを許して。それを破ったときには、指をへし折り、耳を潰すなどして罰を与えた。
　そうやって形だけでも誓うことを強要し、執拗に強いていくほど、彼女は徐々にその誓いにからめ取られていった。
　私は彼女を使って実験したのだ。その言い方が非情に聞こえるならば、私は知りたかった。ただ純粋に。何を？　果たして、人が死後に化けて出るということが本当にあるかどうかを。そのために、あえて化けては出ないと誓わせたのだ。むしろ、そちらへ導くため。残された選択肢はそれしかないのだと彼女に気付かせるため。
　彼女は、その死に際にさえ「化けては出ませんから」と息も絶え絶えに言ったものだ。もはやそれしか言うことができなくなっていた。言わされているのか、自発的に言っているのか区別しがたかった。もう正気を失っていたのかもしれない。最後には、私はその言葉は聞き飽きたとばかりに彼女の舌を抜いた。おかしなことに、それでも彼女はまだ誓いを述べようとしたのだ。あうあうと、言葉にはならない誓いを。

私は、これまでの八ヶ月に渡る労苦はまったく時間の無駄だったとでも言わんばかりに彼女の顔に唾を吐いた。そして顔を踏みつけにした。皮膚が千切れるまで、ぐりぐりぐりぐりと足を捻り込んだ。顔にある穴という穴からぶくぶくと血泡が吹いた。彼女の全身がびくびくと痙攣した。

私は、生きたまま彼女を解体しはじめた。台座に四股をがっちりと縛りつけ、まずは左足を膝の上のところで切断しにかかった。舌のない彼女は叫び声を上げることもできなかったが、拘束具を引きちぎらんばかりにのたうち、暴れた。

まだそんな力が残っていたことに感心しないではなかった。胴体を臍の辺りで切断しようとすると、彼女は陸に上がった魚のように威勢よく跳ねた。しかし、胴の三分の一も切らないところで彼女は力を失い、ついに絶命した。私は、それでもしばらく解体作業を止めなかった。

それから私はじっと待った。ほとんど原形をとどめておらず、一つにつながってさえいない彼女の亡骸を地下室に放置したまま。ただじっと。

どうも加減を誤ったような気がしはじめた。私は考えた。彼女の中には、いつしか恨みや憎しみとは別の感情が芽生えていたのではないかと。それはこんな風に言ってよければ、愛情と呼んでも差し支えのないような何かだったのではないか。少し時間をかけすぎたのかもしれない。そもそも、化けて出るかどうかということが、愛憎の感情と何らかの関係があると考えること自体、おかしいのかもしれないが。

どうでもいい。

ついに出てきたのだから。

そこに佇んでいる。

もはや彼女ではない、何か別のものが。

幽霊予報

今日は朝から一日、不意に一陣の風が吹くこともなく、途端にぞくっとするほど冷えることもなく、出るぞという気配の感じられない過ごしやすい一日となりました。特に首都圏内は十年に一度の大幽現に突入する見込みとなっていましたが、怪奇・心霊被害の報告は１６件。例年に比べても穏やかだったと言えそうです。しかし、この大幽現、明日以降にずれ込むことになりそうです。

ご覧ください。停滞していた幽鬼前線がようやく北上してきます。明け方から伊豆、小田原、横浜と順に霊気に覆われ、昼頃までには関東全域が警戒ゾーンとなります。非常に出やすい一日になりそうです。

湿度も高くなりますので地縛霊の類が活発に活動しはじめますが、今回はそこに季節霊が混じってきます。海から吹く風に乗ってやってくる季節霊は、時代も地域もバラバラに混在しています。今回はそこへ更に、先月中旬太平洋沖に墜落した旅客機の乗客たち３３０名の霊が紛れ込んでくるだろうと予測されます。

心霊庁では霊体確認をすべく乗客の家族らに声をかけていますが、幽霊を恐れて集まりは悪いとのこと。確かに、幽霊は気まぐれに正体を偽ることもあるため、霊体確認の信憑性には問題があると言えそうです。

都内です。天候や時間帯、あるいは地域や場所柄といったものと幽霊の出現率との関係は諸説ありますが、一般に、幽霊は人口の多さに比例して存在するとされます。特に２３区内は調査が済んでいるだけでも一キロ四方に平均５魂の幽霊がいるとされ、明日はこれらの多くがうようよと街にさ迷い出てくる見込みです。東京はまさに魑魅魍魎がうごめく地獄絵図となるでしょう。夜間の単身での外出は控えるのが賢明ですね。

こうした状況は今週いっぱい続く見込みですが、この週末はテレビ雑誌等で怪奇特集が多数組まれるようです。インチキ霊能者にもくれぐれもご注意いただきたいと思います。それでは、また明日お目にかかります。

カラスの住処

　並のカラスよりひと回りもふた回りも大きいその四羽のカラスがはたして兄弟なのか、それともただ仲間というだけなのか、誰も知らなかった。もとはもっとたくさんのカラスの集まりだったが、この一、二年の間に十羽減り二十羽減り、やがてこの四羽だけが残った。いなくなったカラスたちは人間の手にかかったらしかったが定かではない。今更考えても仕方がないと思う四羽は、いつしか似合いの場所に住みついていた。

　山の麓に周辺を杉林に囲われた古い寺があった。その寺の裏手にひときわ太く背の高い杉が四本そびえていて、四羽はその巨木の頂にそれぞれ巣を作っていた。巣からは下方の平地に広がる人間の町が一望できた。その町が四羽の縄張りだった。

　人間が仕掛けた捕獲の罠をくぐり抜ける度に、カラスには知恵がついた。四羽は互いの連携を怠ることもなく、今やどんな罠もするするとすり抜けた。どこでよりよい食料が手に入るか、どうすれば身を危険に晒さずに済むか、四羽はよく心得ていた。ことによると彼らは人間よりも賢かった。

　ある日、四羽がいつものように町のゴミ収集所で食料を探していたときのことだった。何か巨大な物体が空から落ちてきたかのような「ドーン！」という地響きが遠くから伝わってきた。カラスたちは驚き一斉に顔を上げた。我が身の安全を確認するために辺りを見回し、それから互いの無事を知るために他のものと目を合わせた。

　自分たちに異変がないことを確かめると、四羽のうち一番身体の大きな一羽が、今の音は自分たちの巣の方角から伝わってきたのではないかということに思い至った。方角だけでなく距離も一致するように思われて、思うと同時に一羽は巣に向けて飛び立った。他の三羽も一番大きなカラスの感じたことをすぐに理解し、あとに続いた。

　空に出ると、カラスは四本のはずの杉の巨木が三本しかないのを見た。巣の近くまで戻ってくると、人間がうなりをあげる刃を取り付けた金属機械を巨木の根元にあてがうところだった。それが木肌に触れたとたん、轟音とともに巨木から木屑が吹きだした。近づくのは危険と判断したカラスたちは、周辺の杉に忍んで二本目の巨木が切り倒されるのをじっと見ていた。

　瞬く間に、四本の巨木は全て切り倒されてしまった。寝床を失ったカラスたちはひどく不機嫌になり、木から木へ枝から枝へ落ち着かない様子でバサバサと渡った。

　しばらくすると、古い寺の境内に人間の子供たちがやってきた。そこへよく遊びに来る町の小学生の男の子たち五人だった。子供たちを見るともなく見ていた一番大きなカラスは、不意に「あの上にとまってみたい」と思った。あの上とは、子供の頭の上だった。

　一番大きなカラスは、高い枝から滑り落ちるように美しく飛ぶと、一人の子供の頭上で羽を羽ばたかせて体勢を整え、さらさらとした黒髪に覆われたまだ小さな頭を鋭い爪でがしりと掴んだ。それは思いのほかぴったりの大きさで、カラスはその心地に一瞬我を忘れた。それは恍惚と呼んで差し支えないものだった。

　いきなり頭を鷲掴みにされた子供はパニックに陥った。恍惚が思わずカラスの爪を立てさせも

したから、激しい痛みもあった。子供は「ぎゃっ！」と叫んで頭上のものを振り払おうとしたが、その手はカラスの両翼にいともたやすくなぎ払われた。羽を広げたカラスは子供より大きく見えるほどで、力も子供には太刀打ちできないほど強かった。

子供はたまらず上体を折り曲げたが、倒れ込むことはできなかった。それよりも強い力でカラスが上方に引っ張っていたからだ。子供の抵抗はカラスの爪をより深く頭皮に食い込ませ、血が幾筋も顔を伝って流れた。

しつこいもがきに恍惚を殺がれたカラスは、足元の意志ある生物の抵抗を疎ましく思い、股下をぐるっと覗き込む要領で勢いよく嘴を立てた。硬く鋭い嘴の三分の一ほどが子供の右眼にずぼりと突き刺さった。次の瞬間引き抜かれた嘴には、眼球が管をつなげたまま咥え出されていた。

他の四人の子供たちは、目の前で級友の目玉がぐしゃりと挟み潰されるのを見て、黒光りした悪魔の仕業を見る思いだった。と同時に、腰を抜かしてその場にへたり込んでしまった。

新たに三羽の大きなカラスが舞い降りてきて、倒れた級友の顔面に四羽でたかりはじめた。子供たちは、カラスが尖った爪で乱暴に顔を踏みつけ皮膚を切り裂いて、嘴を突き立てて顔面の肉を食いちぎるのを見ることになった。級友の身体は、カラスについばまれているしばらくの間痙攣を起こし、やがてぴくりともしなくなった。

ひとしきり食べ散らかして腹のくちくなったカラスたちは、身動きできないでいた他の四人の子供の頭を一羽また一羽と占拠し「ギエッ」「クアッ」などと満足げに鳴いた。ちょうど、それぞれの頭がそれぞれの足にぴたりと収まる大きさだった。頭皮を破る鋭い爪に子供たちはやがて痛感を取り戻したが、級友の亡骸を眼前にしてカラスに逆らうことができなかった。そこがカラスの新しい巣になった。

四人の子供は、生きた心地がしなかった。頭上のカラスが鳴いたり羽をバタつかせるたびに背筋が凍りついた。四人はカラスの命じるままに立ち上がった。カラスが口をきいたわけでなく、掴んだ頭をぐいぐい上へ引っ張ったのだ。支配下におかれた子供たちには、カラスの足の力の入れ具合で相手の望むことが分かるような気がした。

子供たちにとって、首にかかるカラスの体重は十分に重いものだった。しかし、少しでもよろけるとたちまち爪が頭深く食い込んできた。また、首や頭に手を添えようとすると、すかさず嘴で突つかれた。子供たちは両足を踏ん張って直立するしかなく、まるで拷問だった。

頭にそれぞれカラスを乗せた四人の子供が直立不動にいる異様な光景が発見されたのは、すっかり日も暮れてからだった。発見者たる大人たちは、最初何かの悪ふざけなのかと思った。しかし、子供たちが脇に転がる級友の亡骸を震える指でさすと、事態はただごとではないと理解した。

それは、誰なのか識別できないほど顔面が無残に食い荒らされていた。しかし、その衣服から分かる人間にはすぐに分かり、現場を取り巻いた数人の大人の一人が悲鳴を上げた。その悲鳴によってカラスの間にざわめきが起こり、子供たちの身体はいっそう強張った。子供のうちまだ余力のあるものが、カラスに逆らうと自分も同じ目に遭うと震える声で告げた。大人たちは思わず数歩退いた。子供たちは人質に取られたようなものだった。

所詮動物のすることだし、空腹になれば餌を求めて飛び去るだろうという大人たちの期待はか

なわなかった。むしろ、腹が減ったらあの可哀想な子と同じように我が子を食い殺すのではないか。そんな考えがよぎってぞっとした。大人たちは離れたところに餌をばら撒いてみたり、気を逸らせようと周辺の木を叩いて音を立ててみたりした。しかし、カラスを頭上から離そうとするそうした試みは、いずれも徒労に終わった。

逆に、カラスたちは子供を通じて大人たちに命令した。上等な食糧を持ってこさせ、大人たちを姿が見えなくなるところまで下がらせた。

木陰に隠れた大人たちは、動物だって眠るときがある、そのときがチャンスだと話し合った。そして、交代で状況を見張りながら、救出の具体的な策を練り上げることにした。ところが、驚くべきことに、カラスたちも同じように交代で見張りを立てて睡眠をとったのである。カラスは一分の隙も見せず、少しでも怪しい行動を見せれば子供の命はないと言っているようだった。

そのまま三日三晩が過ぎた。その間ただの一度もカラスは子供の頭上を離れず、周囲への警戒を怠ることもなかった。直立の姿勢を取らされ続けた子供たちは、爪の食い込んだ頭から血が流れて止まらず、意識は朦朧となって白目を剥いていた。

こちらもまた体力も神経も使い果たした大人の一人が、今また木立の合間から状況を伺った。すると、妙な異変に気がついた。子供たちの背丈が急に伸びたように見えたのである。軽率に近寄るわけにはいかず、その大人は別の大人に確かめるよう促した。そうしたところ、やはり四人とも背が伸びたように見えるというのだった。別の大人は、さらに別の恐ろしいことに気づいた。子供たちの足がなにやら樹木のように変化しているというのだ。大人たちは慌てて子供たちのもとへ駆け寄った。

カラスは走り来る人間たちを悠然と見ていた。それはもう警戒をする必要がなくなったということでもあった。はたして、大人たちが恐れたとおり、子供たちの足は樹木のように変化していた。肌は干からびて硬くなり、まるで樹皮のようになっていた。それだけではなかった。その足先がまるで地面に根を張るようにして埋まってしまっていたのだ。急に伸びて見えた背は、奇妙に長くなった首がそう見せているのだとも分かった。その首もまた、木肌のように硬くざらついたものに変わりつつあった。

大人たちは口々に子供の名前を呼びかけた。しかし、白目を剥いて、出血の多さに全身の皮膚が干からびたようになったそれは、間近に見るともはや自分たちの知っているものではないようだった。

四羽のカラスは、憎き人間たちに見せつけてやろうなどとは少しも考えはしなかった。ただ、そろそろ機が熟したと感じたのだ。そして、その黒い翼で大きく羽ばたいて、足で掴んだものを上へ引っ張り上げた。

少し前まで人間の子供だったものの首の部分が、ゆっくりずいずいと上方へ伸びはじめた。カラスが力ずくで羽ばたくと、首だけでなく胴や足までもがずいずいと伸びた。それは三メートル、五メートルとなり、伸びたそばから樹木のように硬いものとなった。あるカラスは空中で回転して伸びるものにひねりを加えた。

それは先日切り倒された四本の巨木と同じだけの高さに達した辺りで止まった。あっという間の出来事だった。大人たちは地面に尻をついたまま、四本の禍々しい樹木のようなものを見上

げた。

　その頂で四羽のカラスが鳴き声をあげると、それは辺りによく響き渡った。

　その晩、ヨシオはインスピレーションに駆られて、その短い文章を一気に書き上げた。
　怪談だった。手応えがあった。
　読み返してみると、自分で書いたものであるにもかかわらず、あまりにも怖くて背筋がぞくっとした。
　その直後、彼は突然苦しげに胸を押さえ、床に倒れ込んだ。
　駆けつけた妻のチカがあわてて救急車を呼ぼうとすると、彼はいいから送信ボタンをクリックしろとうめくように言った。早く。
　チカは言う通りにした。
　改めて助けを呼ぼうとすると、ヨシオはすでに死んでいた。
　こうして、ヨシオの書いた掌握は深夜十二時の締め切り直前に、ある怪談公募サイトに投稿された。それは爆弾だった。一夜明けるまで誰もそのことに気づかなかった。
　翌朝、全国各地で百人に迫ろうという数の人間がパソコンの前で事切れているのが発見された。ネットでヨシオの書いた怪談を閲覧した怪談ファンや他の投稿者たちだった。
　全員がその公募サイトの同じページを開いたままだったことから、死因は直ちに判明した。
　極限の恐怖によるショック死。
「そんなバカな」
　捜査に当たった警官がすでに何人も犠牲になっているという話に耳も貸さず、津田刑事はてんからバカにした様子でその怪談とやらを読んでみた。
　軽蔑を丸出しにしてふんふん鼻を鳴らしながら読みはじめた津田刑事だったが、まもなくふごっと息が詰まるような音を出すと、ひっくり返って息絶えた。
　投稿者の身元はすぐに割り出された。
　訪れた二人の刑事に状況を知らされると、チカは信じられないというように首を振った。彼女はもう何年も前から夫が書いた作品を読まなくなっていた。理由は明白だった。
「素人の私が言うのもアレですけど、あの人には才能のカケラもありません」
　ヨシオの投稿した怪談は、タイトルが空欄になっていた。彼にはそれを決める十分な時間がなかったのだ。
　それはいつしか「殺人怪談」と呼ばれはじめた。

小名木川沿いを走る

　小名木川沿いを走るジョガーは多いが、最近彼らの間で妙な噂が広まっている。
　川沿いを走っていると、向こうから帽子を目深に被った男が走ってきてすれ違うのだという。特に変わったところもない男で、最初は気にも留めない。
　しばらく行くと、先ほどすれ違ったのと同じ男がまた向こうから走ってくる。おやと思ってすれ違いざまにちらりと見るが、帽子のつばで顔はよく分からない。
　またしばらく走っていくと、三度同じ男が向こうから走ってくる。
　今度はかすかに恐怖を感じる。道はまっすぐ。こちらが同じ方向に走っているのに、三度も向こうから現れるなどどう考えても不可能だ。近づいてくると恐怖は増すが、男はただ走りすぎていく。
　更に走っていくと、前方からまたしても同じ男が現われる。まさかという驚きは、一瞬で恐怖に変わる。もはやこの男が普通の人間でないのは明らかだ。
　引き返すことも脇道に逃げ込むこともできないうちに、距離はすぐ縮まる。恐怖に身を硬くしながらも、男から目を離せない。近くまで来ると男は突然加速し、正面から突っ込んでくる。思わずぎゅっと目を瞑る。
　しかし、ぶつかることもなく、男の足音は背後に通り抜けていく。
　何だったのか分からないが、とにかく助かった。
　ほっとして目を開く。すると、男が息がかかるほど近いすぐ横にいて、こちらを覗き込んでいる。そして何とも嬉しそうな声でささやくのだという。
「また見つけた」
　そう言われた者は七日以内に死ぬらしい。
　噂では、その男に四回見つかると「また見つけた」が出るそうだ。
　四回目にすれ違うときに初めて見ることができる男の顔は、顔があるべき場所に何もないとも言われている。
　これとは別に、やはり帽子を目深に被った男が、ジョガーを後ろから追い越していくというパターンもある。やはり四回目に追い越されたとき、男は前に回り込んでこちらを覗き込み、嬉しそうに言うのだという。
「また見つけた」
　どんなに早く走っても、この男からは逃れられないという。
　この男に見つかったら、そのまま同じ方向に走ってはいけない。くるっと反転してもと来た道を戻って走るのだ。
　それでも男がまた姿を現わすことはあるというが、そしたらまた反転して走ればいい。走る方向さえ変えてしまえば、カウントはリセットされて何回見つかっても問題ない。

祭りの夜、ふらりと外出した男は、ふと目をやった奉納者御芳名の看板にあの女の名前を見つけた。ありえないことだった。
男は賑わいから抜け出し、足早に女の家に向かった。
祭囃子が辛うじて聞こえる町外れにその家はあった。主を失って久しい、朽ちるのを待つだけの廃墟だった。
女はこの家屋の床下に眠っていた。男だけがそれを知っていた。
初めて会ったとき、女は唯一の身寄りである母親を亡くしたばかりで、この家に一人で暮らしていた。男には妻子があった。それでも二人が関係を結ぶのに時間はかからなかった。男は四十になったばかり、女は十歳年下だった。
愛人関係が五年も続いた頃、男は女の将来を思って身を引こうとした。今考えるとただ我が身のために考えたことかもしれなかった。
女は聞き入れず、男も結局別れがたくてぐずぐずした。
そのうち女がおかしくなった。
自宅や職場に嫌がらせの電話をかけてきたり、駅で帰りを待ち伏せたりするようになった。女は男に妻と別れるように迫ったが、男にはそれはできなかった。話し合おうとすれば、女はひどく取り乱した。
徒に互いを追い詰め合い、気がついてみると男は女の首を絞めていた。あれも祭りの夜だった。
今、男は六十になろうとしていた。
妻とは二年前に死別していた。二人の子供たちはそれぞれ離れた土地で家庭を持っており、年に一度顔を見せに戻ってくるだけだった。
男はその家の錆ついた門を押し開いて敷地に入った。
ふと目を上げると、玄関前に女が立っていた。憂いのある目で優しく笑う女は、出会ったばかりの頃のような姿をしていた。
女が手招くと、男は夢うつつの表情になって家の中へ消えていった。
その夜遅く、廃墟から火の手が上がり数台の消防車が駆けつけた。通報の遅れもあり、家屋の全焼を防ぐことはできなかった。
焼跡から二つの遺体が発見された。
一つは初老男性の焼死体だった。もう一つは、不可解なことに、白骨化して久しい女性の遺体だった。更に不可解なのは、二つの亡骸が手足を絡ませるようにして横たわっていたことだった。

墓地に住む

俺の住むアパートは一階部分が駐車場になっていた。その上に鉄骨を組んで、二階に三部屋の住居があり、俺はその真ん中に入居していた。

その駐車場がいつの間にか墓地に変わっていた。

もともとこの辺りは墓地が多く、窓を開ければすぐ裏手も墓地だ。下も墓地になったからといって何か不都合があるわけじゃなかった。それに、もともと相場よりだいぶ安かった家賃を更に下げてくれるという。線香の匂いは絶えないし、念仏で起こされるようなこともあるが、我慢できないことじゃなかった。

ある日、アパートの階段の最下段に墓が建っていた。

階段の幅半分に、細長く薄っぺらい墓石が置いてある。一階部分が早くも埋め尽くされ、階段まで侵入してきたのだ。下が地面じゃなくてもいいらしい。

外出する度に下段から順に墓が建っていくのが分かり、階段は狭くて不便になった。

さすがにこれはない。そう思って不動産屋に苦情を言おうとしたが、そんなエネルギーの要ることは俺にはできなかった。だが、こんなことが許されていいはずがない。俺が何も言わなくても、不動産屋か大家か、誰かが何か手を打ってくれるだろう。

そうこうしているうちに、二階の通路まで墓が建ちはじめた。図々しい奴というのはどこにでもいる。誰も待ったをかけないと、平気でこういうことになる。

やはり苦情を言わなければと思ったが、今更何かしたところでもう手遅れだという無力感に襲われ果たせなかった。カウンセラーに相談すると、妄想の症状が出たのかと心配された。分かってはいたが、誰も信用できない。

台所で向こう脛を思い切りぶつけた。墓があったからだ。

俺は不安になった。考えてみると、墓というのは増える一方で減ることがない。このままでは、いずれどこもかしこも墓だらけになってしまう。

トイレに行くにも洗濯物を干すにも、墓が邪魔で仕方ない。どこを向いても常に墓が見えるから気分も沈みがちになる。身体を伸ばして寝ることさえできないし、それに毎晩妙に寝苦しい。墓参りに来た奴が俺を見つけてわっと驚く。失礼な話だ、人の部屋に勝手に上がりこんで。

両隣の奴らもまだ住んでいるようで、ときどき物音が聞こえてきた。壁越しにお経が聞こえることもあるから、やはり墓場になっているんだろう。世の中は平等じゃなきゃいけない。

引っ越すことも考えたが、やらなければいけないことの多さに逆に何も手をつけられなくなる。何より金がない。俺は今働いてもいない。だからここの格安家賃は助かる。だがしかし、いずれ金は尽きる。

そうしたらどうなるのか。飢え死にするんだろうか。すでに供え物を盗み食いして空腹をごまかしている現状だ。

俺が死んだって墓が一つ増えるだけだ。いや、いったい誰が身内に縁を切られた俺の墓を建てるというのか。

　それより、この部屋に住んでいればオプションか何かで、ある日、誰かが、俺の頭の上に墓石をどかんと落っことしてくれて、色々な手間を省いてくれるかもしれない。

我輩はゾンビである

我輩はゾンビである。名前はもうない。

己がどこにいるのやら分からない。何をしているのやら分からない。何かが起きたような気がする。だいぶ前か、ちょっと前のことだ。何か目的があったような気がする。薄暗いじめじめしたところをさ迷っているうちに、すべてがぼんやりとしてきた。もう何も思い出せない。

かすかに光が洩れている場所を見つけた。しばらく引っ掻いていると、板切れが崩れ落ちた。我輩は外に出た。あとに続くものがあった。我輩と同じような者たちだ。大勢だった。この者たちがどこから湧き出てきたのか分からない。ただ匂いのする方に向かった。

我輩はそこで初めて人間というものを見た。あとで知ったところでは、それは数に限りがあったそうだ。我輩は、それを捕まえて食うという話である。そのときは考えもなしにやっていた。別段、恐ろしいとも思わなかった。ただスーと快感に満たされた感じがあったばかりである。

明るくなったり、暗くなったりした。何かが起きたような気がしているうちに、我輩たちは増えた。すごく大勢だ。我輩と同じような者たちばかり見るのは、妙なものだった。その後、人間というものには一度も出くわしたことがない。いなくなった。だいぶ前か、ちょっと前のことだ。

ときどき匂いがした。近寄ってみても何もなかった。いくら考えてみても、何をしに来たのか分からなかった。何か目的があったような気がする。ぼんやりと水と緑を見ていた。ときどき、人間という考えがふっとよぎった。しばらくしたらまた見つかるのではないか。そんなことを考えた。

緑の中を歩いていたら、穴に落ちた。緑は不思議なもので、そこには人間がいた。我輩はいきなり胸を突かれ、穴から放り出された。いやこれは駄目だと思った。我輩は再び穴に入った。するとまた放り出された。我輩は放り出されては入り、放り出されては入り、同じことを繰り返したのを記憶している。そのうち、スーと快感に満たされた。

深川江戸資料館にて

　庄司エリ子です。十九です。大学一年生です。今日は大学の落研の仲間と一緒に、江戸時代のことを調べに深川江戸資料館に来ました。夏を満喫してます、庄司です。閉館時間も迫ってそろそろ引き上げようかってとき、私、一人で船宿の升田屋にいました。縁側の奥に厠があって、まぁ戸があれば開けますよ。厠に入ったら人ってまずどこ見ます？　穴の中見ますよ。現代なら便器の中だ。私はそうです。厠は床が四角く切ってあるだけです。はぁーとか思ってたら、その中にいましたよね、なんか子供が。穴の底でうずくまって、こっちを恨めしげに見上げる子供。出た！　出ました。ヤバイもの見たと思って、戸をばたんと閉めましたよね。エリ子、焦ったときは数を数えて。１、２、３。そう。４、５、６。落ち着くのよエリ子、深呼吸。もう一度開けて確かめてみたりしませんよ。私は何も見なかった。いや、だけど、じっとこっちを見てた。私は見られていた。見られているのを見た。見てしまった。つまり、やっぱり私は見てしまった。厠の中に、暗い穴の奥底に、子供がいた、男の子が。出ました。冷えたわー。えーマジ？　今のマジ？　超怖ぇ。怖いんですけど。うけるー。いるんだねー。この目撃情報、みんなに教えるべき？　いや、話したらみんな面白がって厠に行くだろう。みんなで見れば怖くない。いや、怖くならない時はあっちで出てこないかも。あの子にも何か考えがあるのかも。そっとしておくべきかも。本日のショータイムはおしまいかも。江戸時代の子か、君は。まさか。この資料館ができたより後に決まってる。てか、マジでそういうこと？　迷子とかじゃないの？　かくれんぼしてて誰も見つけてくれなかったとか。あそこに落ちて亡くなった来館者がいるか係りの人に訊いてみるべっきー？　でもそれで口ごもられたりしたらイヤじゃない？　おっと、先輩が呼んでます。エリ子はここよ。もう行かなきゃ。早く深川めし食いてー。

対岸の空き部屋

　対岸にある賃貸マンションの一室は、何年も借り手がついていなかった。川向かいの安アパートに住む彼の部屋から、そのがらんとした室内はよく見た。
　彼は学生時代から数えてもう十年その部屋に住んでいた。
　注意して観察していたわけではないが、対岸のマンションの空き部屋はその間一度も入居者がなかったようだった。ひょっとしたら事故物件か何かなのかもしれない。
　ある夏の晩、彼は暑さのせいで目を覚ました。
　風を入れようと窓を開けたとき、彼は対岸の空き部屋で何か黒い影が蠢いているのに気がついた。網戸越しにじっと目を凝らしてみると、それが巨大な魚であることが分かった。そうとしか見えなかった。部屋は水に満たされているように見えた。
　その中に人が浮いていた。頼りなく揺れ沈んでいくその身体を、巨大魚が旋回しながら小突き上げて弄んでいた。巨大魚は鋭い歯と強力な顎でその肉を食いちぎった。
　よく見ると、水中に浮かぶ身体は彼自身だった。
　彼は、己の身体が食い荒らされ、飛び出した腸が水中にたゆたう光景を、まるで悪夢を楽しみでもするかのように、一種の陶酔をもって眺めた。
　まだ夜だった。
　次の眠りから目覚めたとき、彼は巨大魚が出てくる夢を見たことをかすかに覚えていた。何か生々しい手触りのある夢だった。
　その夢の名残りに導かれるようにして、窓の外に目をやった。
　そこには、夜の暗い川の向こうに彼が十年暮らした安アパートの部屋が見えた。カーテンは締め切られていた。そのせいかどうか、室内がどうなっていたかまるで思い出せなかった。
　彼がいるのはマンションの空き部屋の方だった。今はがらんとして何もなかった。しかし、その部屋がかつてどんな様子だったか、彼はよく知っているようだった。
　もうずっとそこにいたような気がした。それでも、この部屋のことも、他のあらゆることも、ゆっくりと忘れてゆく一方のようだった。
　彼はもうほとんど何も覚えていなかった。
　そのとき、暗がりから巨大な魚が現われて彼の身体を弾き飛ばした。彼の身体は浮き上がり、またゆらゆらと沈みはじめた。
　彼は水の中にいた。
　夢ではなかった。にもかかわらず、苦しくなかった。
　巨大魚が彼の脇腹を食いちぎると、水中に腸が飛び出した。彼は己の腸が水中にたゆたう様を、何の感慨もなく見ていた。

何が見えるの

「ほら」と言って千夜は指さすのだ。
　見ると必ず、その先に何かがいた。それは一瞬で消えてしまい、何なのかはっきりとは分からなかった。あるいは、ただ妙な気配を感じただけかもしれない。本当は何もいなかったのかもしれない。
　千夜は一人遊びの好きな子供だった。彼女の切れ長で人を見透かすような目は、大人の女のもののようだった。しかし、指にはまだ幼女のあどけなさがあった。
　千夜がその指で「ほら」と言ってどこかを指すたびに、何かが起きた。
　例えば、祖父と母が相次いで急死した。それから、父が行方知れずになった。
　千夜は遠方の親戚の家に引き取られた。
　その家には千夜と同い年の千鶴がいた。二人で遊んでいるとき、千夜は「ほら」と言ってドアの隙間から覗き見えた隣室の暗がりを指さした。
　千鶴は神隠しにあったように消えた。
　陰うつな空気が家を支配した。
　ある晩、千夜は「ほら」と言って、いつの間にか開いていた天袋の中の闇を指さした。千鶴の両親の反応は鈍かった。まるで何も聞こえていないかのようだった。しかし、千夜が「千鶴よ」と付け足すと、二人とも顔を上げてそこにいるものを見た。
　また一人になった千夜は、児童福祉施設に引き取られた。
　千夜が来ると、そこの子供たちはじょじょに元気をなくしていった。誰も以前のように笑わなくなった。
　千夜はその中の一人の男の子といつも一緒にいるようになった。千夜が「ほら」と指さすと、男の子はそちらを見て「ホントだ」と言った。そして、二人で秘密めいたように笑うのだった。周りの子供たちは二人に近寄らなかった。
　ある夕方、千夜と男の子は二人で遊戯室にいた。
　千夜は「ほら」と言って、口をあんぐりと開いて、その中を指さした。男の子は中を覗き込んで「ホントだ」と言ってくすくす笑った。
　男の子は、千夜の上顎と下顎を掴んでぐいと押し広げた。千夜の口は、子供が一人入り込めるくらい大きく開いた。喉奥の暗がりから伸びた長い舌が、誘うようにゆっくりと波打っていた。
　男の子はくすくす笑いながら、その中に頭から入っていった。
　千夜は、男の子をすっかり飲み込んでしまうと、唇を舐め、目だけで妖しく笑った。

泥鰌掬い

「泥鰌掬いといったら踊りなんですが、うちは本当に泥鰌を掬うんです。金魚掬いと同じです」泥鰌掬い業者の田中は言った。
　江東区Ｍ小学校のＰＴＡ行事委員会は、夏祭りの余興でこの泥鰌掬いをやることに決定した。
　八月のある土曜日、Ｍ小学校の校庭にはまだ日が高いうちから人が集まりはじめていた。主に低学年の子供たちとその母親だった。
　校庭の一角には泥鰌の入った水槽が四つ用意されていた。水に濡れるとすぐ破れてしまう紙を張った専用の掬い網や、取った泥鰌を入れるお椀など、道具も揃っていた。
「網を使って掬ってももちろんＯＫです。でも、もっと面白いのが、素手で掴み取りすることです」業者の田中は子供たちに説明した。
　その丁寧な口調といかにも子供好きそうな笑顔に安心した母親たちは、心置きなくおしゃべりに興じた。子供たちは争うようにして水槽の周りにしゃがみ込んで、きゃっきゃと遊びはじめた。
　まもなく、母親たちは子供たちがひときわ騒がしくなったことに気がついた。どうやら網を放り出して手掴みで泥鰌を掴まえはじめたらしい。
　見ると、田中は全体に気を配りながらもにこにこ笑っていた。子供たちも羽目を外しすぎることはないようだった。これがいつもの展開なのだろうと、母親たちはこの場は田中に任せることにした。それに、ろくに川遊びさえしたことがない子供たちにはいい経験かもしれない。
　やがて、おしゃべりに夢中だった母親たちは何か様子がおかしいことに気がついた。いつの間にか、子供たちがやけに大人しくなっていたのだ。
　見ると、子供たちはみんな水槽に手を突っ込んで、何か目をうっとりさせているのだった。涎を垂らしている子もいれば、隣の子と一緒になって忍び笑いをしている子もいた。
　ある母親が、一人の子供が泥鰌を生きたままつるりと飲み込むのを見て、「あっ」と小さな声を発した。
　母親たちはいったい何事かと水槽に駆け寄り、中を覗き込んでぎょっとなった。そこには泥鰌が気味悪いほどうじゃうじゃいたのだ。
　泥鰌があまりに多く、水など見えなかった。底の方にわずかに残っているらしい水は、粘り気を帯びていた。泥鰌は身をくねらせながらわずかな隙間に侵入していき、ぬらりと光る体が絡み合うとにゅぷにゅぷ音が聞こえた。
　よく見ると、その黒く細長い生き物は泥鰌でさえなかった。どちらが頭でどちらが尾なのかも分からない、見たこともない生き物だった。
「よしなさい！」
　ある母親がヒステリックに叫んで、我が子の手を水槽から引き抜こうとした。
　しかし、周りにいた子供たちに押さえつけられ、子供を掴んだその手を逆にぬらりと黒光りする細長い生き物が溢れのたうつ中ににゅっと挿し入れられた。

脳天がしびれるような快感がその母親を襲った。彼女はほんの一瞬それに耐えたが、すぐに堪えきれなくなり、「あ、あぁぁぁあぁ」と箍（たが）が外れたような声と吐息の入り混じったものを洩らして、崩落した。

なになにどうしたの、と他の母親たちが彼女を取り囲んだ。

彼女は、口ではどうにも説明できないとばかりに、もう片方の手で他の母親たちの手を次から次へと掴んでは、水槽の中にうにゅうと挿し入れていった。「あっ」「あぁ」「あぁぁあぁぁぁ！」

残りの母親たちは、何が起きているのか確かめようと、子供たちを弾き飛ばして自ら手を挿し入れた。「あーぁ、あぁ！」

水槽は母親たちに占領された。

子供たちは、それぞれお椀にその生き物を数匹ずつ掬っていた。

彼らは地べたに座り込んで、それ指に絡ませて弄んだ。女の子のシャツの襟から背中に流し入れる男の子もいた。自分の下着の中に流し込む男の子や女の子もいた。

恐る恐る指先だけを挿し入れていた母親も、なけなしの理性で持ちこたえていた母親も、やがて等しく快感にひれ伏し、手首まで、やがて肘まで、そのぬめり絡み合う生き物の中にずっぽりと埋めた。

そのとき、ある母親がいきなり服を引きちぎるように脱ぐと、水槽の中に飛び込んだ。

彼女は「あぁぁあああぁあぁ」と笑っているとも泣いているともつかない叫び声を上げながら、生き物の中ににゅるうと飲み込まれるようにして沈んでいった。

と同時に、その生き物が水槽から溢れ出て、縁から地面にこぼれ落ちた。その生き物は母親たちの足元でうねっうねっと切なげに身をくねらせた。

女たちはごくりと生唾を飲み込むと、牽制するように視線を交わした。それから口元に淫靡な笑みを浮かべて、競うように衣服を脱ぎはじめた。

泥鰌救い業者の田中は、狂乱から離れたところで猫背の姿勢で立ち、肩を震わせるようにして怪しげに笑っていた。

捕獲

「つかまえたぞ！　お前も来い！」
　久しぶりに連絡してきた友人の興奮ぶりに訳も分からないまま駆けつけてみると、幽霊を捕まえたということだった。
　それは、このところずっと彼を悩ませていた幽霊だという。外出しようとするたびに玄関のところにぬーっと現われては、出かけさせまいと邪魔していたらしい。
　仕方がないので部屋にこもって幽霊を捕まえる罠を作っていた、と彼は言った。
　どうやら、それがここしばらく大学で彼の姿を見かけなかった理由らしい。
　信じるか信じないかはともかく、これは変わり者で知られた我らの友人を、この黴臭い部屋から引っ張り出すチャンスだった。
　今度はどんな悪戯を思いついたのか知らないが、カーテンを閉め切った薄暗い部屋はゴミや物が散乱して足の踏み場もなかった。
　ろくに運動もしていなかったのだろう。睡眠だってまともに取れていないのかもしれない。彼は血走った目をしばたかせ、背を丸め、足を引きずるようにして歩くのだった。
「こいつだ！」
　彼は座卓を覆うようにして被せられた布切れを勢いよく引き剥がした。
　そこには足があった。
　より正確に言うと、片方の足の、足首から下の部分があった。
「本体は逃げやがったがな」
　そう言いながらも彼はほとんど誇らしげだった。幽霊を捕まえたなど前代未聞だろうとでも言いたいらしい。
　幽霊には足がないというが足じゃないかこれは、などと突っ込むのもバカバカしかった。よくできているがオモチャに決まっていた。それに、幽霊というにはちょっと実体感がありすぎる。
　彼はこれまで散々自分を悩ませた幽霊の足に向かって、たっぷり痛めつけてやると告げると、「けーっ、ひっひっひぃ！」といかにも趣味の悪い感じに笑った。
　この寸劇が終わるまで口を挟ませてもらえそうになかった。しかし、彼が台所から包丁を取り出してくると、さすがにこちらも身構えないわけにはいかなかった。
　そのとき気がついたのだ。彼の片足の、足首から下がなくなっていることに。
　あっと思ったが、何も言えなかった。
　痛くないのか、痛みも感じないほどおかしくなってしまっているのか、彼は座卓の上にあるのが自分の足だとは分かっていないようだった。
　彼はニタニタ笑って包丁を振りかざすと、かつて自分のものだった足に容赦なく振り下ろした。そして、快感に身もだえするようになって「けーっ、ひっひっひぃ！」と笑った。
　狂ったように笑いながら、彼は何度も何度も包丁を突き立てるのだった。

深川の雪男

　ある夏のこと、脚本家の佐藤啓二は取材で深川界隈をうろついていた。
　暑さしのぎと気分転換を兼ねて現代美術館でモネ展を見ているとき、高校の同級生Ｋがこの辺りに住んでいることをふと思い出した。電話をかけてみると、ちょうど暇だということだった。
　五年は会っていなかった。深川不動で待ち合わせて、近くの蕎麦屋に入った。奥の座敷に通されると、まだ日のあるうちからビールを開けた。
　昔話も一通りやり終えたあと、佐藤啓二はところでと話を変え、何かいいネタはないかと訊いた。
　彼は依頼されたホラー映画の脚本の執筆に行き詰まっていた。この土地へ来たのも、遅ればせながら深川七不思議というものがあるのを知ったからで、何かヒントが見つかればと期待してのことだった。
　Ｋは少し考え顔になってから言った。
「最近、この辺に雪男が出るんだ」
　それだけでは意味が分からず、話の続きを待った。しかし、Ｋはそれ以上何も言わなかった。笑わせようとしたのか、思いつきを言ってみただけなのか、佐藤啓二は曖昧に笑ってそれ以上深く訊かなかった。
　二人は休みなくビールを飲んだ。
　そのうち、Ｋは高校の思い出話にはいくらでも笑顔で応じるが、今の仕事や女のこととなるとやけに口が重くなることに気がついた。あまりうまくいっていないのだろうと感じたが、立ち入って訊くことはしなかった。
　そろそろ店を出ようというとき、Ｋがぼそりと言った。
「女のことで困ってる」
　まるで女気などないのではないかと他人事ながら心配になっていた佐藤啓二は、むしろ安心したほどだった。
　聞けば、今その彼女と一緒に暮らしているのだという。少し冷たいところはあるがうまくいっていて、「もう一生離れられそうにない」などと大袈裟なことを言うのだった。そのわりには顔色は沈んでいた。
「何が問題なんだ」佐藤啓二は訊いた。
「前の男が彼女を取り返そうとしている」
「前の男って」よほどタチの悪い奴なんだろうか。
「言っただろ」Ｋは言った。
　佐藤啓二は首をかしげた。
「雪男だよ」
　佐藤啓二は長い振りの冗談だと理解して「お前の女は雪女か」と突っ込んだ。しかし、その直後、はっと記憶がよみがえり背筋に寒気が走った。

高校で山岳部に所属していたＫは、何年か前に冬山の登山で遭難したのだった。「江東区の会社員が遭難」とニュースにもなった。思えば、Ｋがこの界隈に住んでいると知ったのもそのときだったのではないか。

佐藤啓二は、Ｋが発見されたという報せを聞いたかどうか必死に思い出そうとした。おそらく聞いていない。まさか、Ｋは今もまだ山の中で発見されずにいるのだろうか。

そんなはずはない。なぜなら、今目の前にいるのは間違いなく……。

ふと見ると、Ｋの顔はやけに青ざめていて少しも酔った様子はなかった。まるで死んでいるかのように表情が凍りついていた。

佐藤啓二が思わずさっと掴んだ伝票に、Ｋも手を伸ばしてきた。その手はぞっとするほど冷たかった。

愛犬バズ公

　昨日犬が人を五人も噛み殺したって事件があったろ？　ありゃうちの犬だぞ、おい。やべぇやべぇ。ちょっと隠しとかなくちゃ、うちのバズ公をよ。
　大体五人もやるこたぁねぇのによ、あのバカ犬。あのクソ親父だけだったんだ、俺が言ったのは。こっちが気分よく歩いてるとこに、後ろからクラクションなんか鳴らしやがって、エラっそうに。頭に来るぜ。だから俺はバズに噛みつけって言ってやった。言うよ、お前みたいな奴には、俺は。バズ、あいつに噛みつけ！　やれ！　そしたらあのバカ犬、周りにいた関係ない連中までガブリさ。強烈だからな。鍛えてあるから。うちのバズ公は人間がぎゃあつく騒ぎ出すと頭に血が上ってわけが分からなくなっちまうんだな。でも最高の犬じゃねぇか、え？
　バズ公がこれまでにやった人数？　ちょっと数え切れねぇな。ホントしょっちゅうだから。でも夢に出てくるぜ、やられた奴ら。だいたい大勢でいっぺんにな。連中、わんわん、わんわんって俺に向かって吠え立てやがるのさ。ありゃ抗議してるんだろうな。何となく分かるぜ。でも少しも怖くねぇ。うるせぇだけ。だから俺は夢の中にもバズを連れて行くんだ。それで言うね、俺は、ああいう奴らには。やれ、バズ！　皆殺しにしろ！　うちのバズ公は喜んでやるさ。そういうのが大好きだから。血祭りよ、血祭り。
　そりゃ夢さ。でも妙なことに、そういう夢を見た次の日、バズの野郎、夢の中で散々やりまくったっていうのに、こっちの世界でもやりたくてやりたくてしょうがねぇって顔してやがる。もう目がギンギラしちゃって、やべぇの。まぁ俺と同じ夢を見たのかもしれないよな。何しろ俺の犬なんだから。最高の相棒だろ、え？
　とにかく、こうなったらもうやることやらなきゃ収まりがつかねぇ。それで俺はあいつとお散歩と洒落込むわけよ。思わず大声で言いそうになっちまうね。やっちまえ！　手当たり次第にやれ、バズ公！　やれー！　って、言わねぇけど、面白そうだろ？　でもお前らみたいな連中がいたら、俺は言うね。やれ、バズ！　噛みつけ！　脳みそまで食っちまえ！

門前仲町駅前自転車置場奇譚

この広い駐輪場で起きている怪奇現象は、実にささやかなものである。

停めたはずの場所から自転車がなくなってしまうのだ。といっても、完全になくなるのではない。違う番号に入っているのである。

報告によれば、この現象は週に一度程度の割合で起きているらしい。すぐ近くの番号に入っていることもあれば、遠く離れた番号のこともある。

いずれにしろ、移動は駐輪場内に限られているのだが、それでも盗まれたのだと勘違いして諦めてしまう者もいる。

監視カメラの映像も調査したが、何者かが自転車を動かしている様子はなかった。まして常駐の監視員による悪戯などではない。誰が手を触れるわけでもないのに、いつの間にか別の番号に移動してしまっているのだ。

たいしたことではないが、これはけっこう苛々する。

急いでいるときのことを考えてみるといい。改札を駆け抜けて駐輪場に来たものの、入れたはずの番号に自転車がないのである。他のどこかに入っていると分かっていても探している暇などない。仕方なくタクシーを使う。無駄な出費である。自転車は後日探さなければいけないし、当然駐輪代も四時間ごとに百円ずつじわじわと上がっていく。

ある日、近所の子供が大きな蝉を捕まえたといって監視員に見せに来た。

蝉にしては大きすぎた。子供によれば、女子高生の自転車のサドルに頬ずりしていたところを虫取り網で捕まえたという。隙だらけだったらしい。

監視員は直感した。こいつは駐輪場を専門に悪さを働く妖怪ではないか。通報で駆けつけた警官によって尋問がなされた。

警官が迷惑千万な妖怪めといって往復ビンタを食らわせると、そいつは「妖怪と違う。わしは自転車の神様や」と言った。

警官が口答えするなといってもう一度往復ビンタを食らわせると、そいつは足元がふらふらになりながらも「おばあちゃんにわしのことを教わらんかったのか」と非難交じりに問うた。

落ち着いて事情聴取してみると、どうやら本物であるらしいと分かった。警官は面白くなさそうな顔になって、うちの祖母は自転車に乗れないからなと誰にともなく言った。

話し合いの結果、自転車の神様にはこの駐輪場から出て行ってもらうことになった。去っていくその後姿はどこか淋しそうだった。

深羽子のことで話し合いに来たはずなのに、気がつくと俺は奴の首を絞めていた。
俺と深羽子はほとんど終わりかけていた。それなのに、こいつが俺から何もかも奪っていくように思えた。俺には深羽子の他に何もなかった。何ひとつだ。今更そんなことに気がついて、俺は狂った。
奴の死体の傍らで、俺は縛りつけられたように動けないでいた。取っ組み合いの最中にひどい揺れがあったことがあとからぼんやり思い出されたが、何であれ俺はもう終わりだった。
そのとき、建物が轟音にきしんだかと思うと、黒い濁流が流れ込んできて西田孟洋の部屋を飲み込んだ。俺は玄関ドアから外へ押し流された。
訳も分からないまま必死の思いで表の階段を上がり、濁流に飲まれそうになって手摺りにしがみついた。この世のこととも思えなかった。
俺は助かった。奴の死体は海へ引きずり込まれた。そして、深羽子は行方不明になっていた。海岸近くを車で移動中だったらしい。
俺は毎晩海岸をさ迷い歩いた。その静けさが俺を責め立てるようだった。自分のやったことにどんな意味も見出せなかった。
深羽子を返せと呪い、西田孟洋の遺体が見つからないことを願った。ときに理屈に合わない嫉妬に悶え苦しんだ。何度となく深羽子の後を追おうと思ったが、できなかった。まもなく、耐え切れなくなって田舎を離れた。
夜になると俺の眠りは水に満たされる。
水は黒く濁り、渦を巻いている。俺は呼吸を求めて必死にあえぐ。
そのとき、水の底からぬっと腕が現われて俺の足を掴む。傷だらけの表皮がふやけて腐乱した腕だ。俺は恐怖に駆られて蹴り払おうとする。しかし、そいつは足首がちぎれるような力で掴んで離さない。俺は暗い底なしの水の中へ引きずり込まれる。
俺はぐっしょりと汗をかいて目を覚ます。足首にはそいつに掴まれた跡が赤くなって残っている。
あの日俺がやったことを知る者は、誰もいない。

波間／深羽子のこと

深羽子は、かつて通った高校の西棟の階段を上がっていた。まるで自分の意思で歩いているのではないような、おぼつかない足取りだった。

三階から屋上へ出る手前の薄暗い踊り場に、大きな鏡があった。その鏡には人間ではないものの姿が映るという噂があり、生徒たちの寄りつかない場所になっていた。

一つ年上の滋春と初めてのキスをしたのは、高校二年の春、この鏡の前でのことだった。そのときは半年もしないで別れたのだったが、二十四のときからまた付き合いはじめた。

それからいいときもあれば、悪いときもあった。しかし、この半年ほどの間に状況も気持ちもひどくこんがらがってしまい、自分でも何をどうしたいのか分からなくなっていた。

深羽子は、鏡の前に立った。すると、そこには彼女の目に見えているものとは別の光景が映り込んだ。階段は崩れ、瓦礫が散らばり、ひび割れた壁や天井からは水が滴り落ちていた。鏡の中の校舎は廃墟のようだった。

あのとき何が起きたのか、ふいに思い出した。

仕事の途中で車を停めて考えごとをしていたのだった。滋春のことと、孟洋のことだ。直前にひどく大きな地震があって、なぜか自分が陥っている状況に決着をつけるよう迫られた気持ちになったのだ。

孟洋と激しく求め合うほど、滋春がいとしく思えてくることが自分でも不思議だった。まるで違うタイプの男というのではなかった。むしろ二人は似ていた。二人とも、自分の内に一人では抱え切れない何かを持っていた。その何かが深羽子の中の空虚な部分を埋めてくれるような気がした。

深羽子の気持ちは決まらなかった。滋春といるときに孟洋のことを思い、孟洋といるときに滋春のことを思った。そうして一人になると言いようのない苦しみに襲われ、考える気持ちを挫かれてしまうのだった。

停車していた場所から、ちょうど母校が見えた。深羽子は校舎を見ながら高校の頃の滋春との思い出にしばし耽っていた。そのとき津波に襲われた。

運転席にいた深羽子は、何かに押さえつけられたように動けなかった。ほんの一瞬、楽になりたいと思った。思い直したときにはもう遅かった。二人の間で気持ちが引き裂かれたまま、一人で死ぬのだと観念した。

深羽子が覗き込んだ踊り場の鏡には、彼女自身の姿は映らなかった。深羽子は、もう一度二人の男のことを考えた。

波間／孟洋のこと

市街のホテルで深羽子と会ったあと、孟洋は車で彼女を駅まで送った。
町まで一緒に戻るわけにはいかなかった。車に同乗しているところを見られただけで、話はあっという間に広まってしまうだろう。
深羽子は滋春の女だった。町では二人の関係を知らない者はいなかった。深羽子が滋春の子供を流産し、婚約も破棄寸前だとそれとなく知りつつなお、周囲は二人が結ばれることを望んでいた。
一方、孟洋は転勤でこの土地に来て、まだ二年に満たないよそ者だった。よそ者であることには慣れていたが、容易には入り込めない土地の者同士の結びつきは未だに強く感じていた。
深羽子を降ろしたあと、孟洋は一人夜の港に立ち寄った。
外では雪がちらつき、エンジンを切ると車内は急速に冷えた。
最初は軽い気持ちもあった。初めて身体を重ねた夜、深羽子が「幸せになりたい」とぽつりと呟いた。それで思いがけない深みにはまった。
まもなく、滋春も孟洋と深羽子のことに気がついたようだった。しかし、仕事で顔を合わせても何も言ってこなかったし、深羽子を問い詰めるでもないようだった。
滋春と深羽子は自分たちでは終わらせられないだけのように見えた。それでも孟洋が思い切ろうとすると、深羽子はいつも尻込みするのだった。
遠くで何かが妖しく煌いた気がして、孟洋は闇に溶け込んだ水平線に目を凝らした。すると、青白い焔が波間に揺らめいているのが見えた。一つではなかった。いつの間にか、無数の焔が沖合いに浮かんでいた。
と同時に、孟洋はあるイメージに襲われた。町が大水に襲われ、抗う術もなくすべてが海へ流されていく。孟洋はその様を上空から見るようにしていたが、彼自身もまたその大水に飲み込まれていることが直感的に分かった。
一瞬のことだった。海は暗く広がり、雪が水面に落ちては音もなく溶けていた。孟洋はその場に立ち尽くして海を見据えていた。
未来のイメージを見るのは、これが初めてではなかった。
それはいつも現実となった。
俺は死ぬのか。孟洋はそれを避けられないものとして受け止めている自分に驚きもしなかった。そして、これまでの何に対するよりも強く、彼は深羽子を欲した。

深川の文士先生

深川をこよなく愛した文士鷹岡嘉門は、文学史上は地味な存在だが怪談もいくつか残している。

この文士の身辺では、しばしば奇怪な現象が起きたらしい。

文士先生は、締め切りが迫ると妖怪の悪戯によって突発性の難聴になり、催促の電話が聞こえなくなった。また、嫌いな編集者が家に来ると、邪悪な魂が乗り移った飼い犬ががぶりと咬みつくのだった。

酒の席で霊魂の存在を巡ってある文芸評論家と口論になったときのこと。

別れ際にタクシーに乗り込もうとした相手を呼び止めた文士先生は「ほら、あそこに」と虚空を指さした。相手がそちらに気を取られた隙に、文士先生は力いっぱいドアを閉めた。文芸評論家は指を挟んで悲鳴を上げた。文士先生は「いるんですよ。なんて悪い奴らだ」といかにも忌々しそうに言った。

ある日、文士宅に手伝いで来ていたある婦人が、折からの嵐で帰宅できなくなった。

泊まっていくことになった婦人は、深夜に廊下を歩く謎の足音を耳にして恐怖に震え上がった。布団を頭からかぶって息をひそめていると、その足音は部屋に入ってきて枕元で止まった。

婦人はとっさに脇に転がっていた物差しを手にし、無我夢中で振り回した。一発、手応えを感じた。すると、足音は夜の闇の中にばたばたと遠のいていった。

翌朝、婦人は文士先生にその出来事を話した。

文士先生は、それは悪戯好きな妖怪の仕業に違いないが、いずれにしろたいした悪さはしないから心配ご無用と言ってかっかっかと笑った。文士先生の額には、物差しと同じ幅の赤い腫れがくっきりと残っていた。

彼は晩年には降霊術に凝った。

死んだ大作家の魂を呼び寄せては自らの身体に憑依させた。大作家たちは文士先生の口を借りて「鷹岡嘉門の作品をもっと評価せよ」と言った。

文士先生が死んだときのこと。

弟子たちが墓に遺骨を納めようとすると、それは骨壷ごと忽然と消えてしまったという。

階段の死闘

　誰かが「窓を開けないでください。ハトが入ってきます」という注意書きを無視して窓を開け放しにしたらしい。オレとＳが階段を上ってくると、頭上でばさっと何かが羽ばたく音がした。ハトじゃなかった。カラスだった。それも、やたらデカい。
　この妙な作りの雑居ビルは、五階から七階が美術ギャラリーになっていた。一般利用可能なエレベーターが四階までしかないので、その先は階段移動になる。
　オレとＳは七階で開催中のＹの個展を見に来たのだ。現代アートの世界では、このギャラリーで個展を開くことは新人の登竜門とされているが、Ｙの絵は子供の落書きみたいなもんだ。それにはＳも賛成している。もちろん、オレとＳも芸術家のはしくれなわけだが、今はそんなことはどうでもいい。今はカラスだ。
　そのどデカいカラスは、急降下してＳに襲いかかった。爪で額を切り裂かれ、鋭い嘴で目玉を潰されたＳは、叫びながら階段を転がり落ちていった。
　カラスは、未来の大芸術家であるオレにも容赦なく襲いかかってきた。腕の皮膚を切り裂かれ、オレは泣き喚きながら持っていた団扇を振り回して応戦した。
　階段を上がって六階に逃げ込もうとしたが、フロアに通じる鉄の扉は堅く閉ざされていた。見ると、「今週は展示替えのためお休みです」と正方形の小さい紙に、こじんまりと書いてある。畜生。ハメられた。
　オレは下の踊り場に倒れたＳを見た。足はひん曲がり、ぴくりとも動かない。
　Ｓが死んだことにはどんな感慨もなかった。Ｓ、こいつは尊大でイヤな奴です。絵が二十万で売れたとか、有名美術評論家とフェイスブックでつながってるとか、いつもいつも自慢ばっかりしやがって。死んで当然だ。いいＳとは、死んだＳだ。
　開いていたのは六階と七階の間にある窓だった。カラスの奴をそこから追い出すか、それとも真っ向勝負を仕掛けるかだ。
　オレは持っていた団扇で「あっちへ行け、あっちへ行け」という感じでカラスを窓の方に追いやろうとした。しかし、奴はひょいとかわして、手すりをとんとんとんと跳ねてうまく距離をとった。
　そういうつもりなら仕方ない。勝負してやろう。空中戦ってわけじゃないんだし、人間の成人男子が鳥類と戦って負けるわけがない。確かに足場は悪いが、それくらいのハンデはくれてやる。
　カラスがカァと乾いた声で鳴いた。カラス、なぜ鳴くの。いつでもいいぜということらしい。いい気になっていられるのも今のうちだ。
　オレは団扇を捨て、斜め掛けにしていたショルダーバッグを外して紐を握りしめた。道具を使えるのが人間と動物の決定的な違いだということを教えてやる。
　オレは息を詰めてタイミングを見計らった。
　カラスが再び羽ばたこうとした。オレはその瞬間を逃さず、大きく息を吸い込んでショルダ

ーバッグをやぶれかぶれに振り回しながら突っ込んでいった。
　まぐれ当たりの一発が奴の横っ面に当たった。
　壁に跳ね返って階段に落ちるカラス。
　オレはとどめの一撃を食らわす。飛び上がって、かかとで踏みつけにするのだ。ありったけの体重をかけて、仕上げにぐりぐりひねってやる。
　完全勝利。百獣の王はウサギを仕留めるのにも全力を尽くす。オレは全身から力が抜けるのを感じた。
　そのとき、下から何か音が聞こえた。見ると、Ｓの死体に黒いカラスがのしかかっている。別の奴だ。いつの間に。しかも、こいつがまた、やたらとデカい。そして、Ｓを食っている。いかにも野蛮で獰猛な食べ方だ。道具を使えないと、こういうことになる。
　どうなってやがる。カラスの奴らめ、突然変異でもしたのか。
　四階まで降りるのが得策とは思えない。こちらはかよわい芸術家だ。普段抽象的なことばかり考えているし、食べてもおいしくありません。オレは七階を目指そうと、そろりそろりと階段を上がった。
　何なら七階ギャラリーにいるＹを「見せたいものがあるんだけど」と誘い出し、階段に突き落として締め出してやってもいいかもしれない。それがいい。そうすべきだ。
　いや、それともそのＹが、これを仕組んだんじゃないのか。Ｙ、こいつは気取ったイヤな奴です。いかにもありそうなことだ。芸術家には敵が多い。七階のギャラリーで次はオレの個展をする話でも持ち上がって、嫉妬したのかもしれない。
　すると頭上でまた何やら音がした。開け放しになっていた窓のところに、また別の一羽が降り立ったのだ。
　もちろんカラスだ。今日見た中でも最大級のやつ。ハトはどうした、ハトは。
　そいつは挨拶代わりにカァと鳴いた。こりゃどうも。
　そのとき、下からもカァと聞こえた。見ると、Ｓを食っていた奴が今度はオレに狙いをつけている。
　挟み撃ちかよ、畜生。

ぼくの家族は、いい家族

死んだふりをした弟がどこかに潜んでいるはずだ。
ショッピングモールの立体駐車場の三階で、ぼくはきれいに並んで停められた車の陰に隠れて弟を探していた。お父さんとお母さんはまだ中で買い物をしていた。
死体を見つけたら、真面目くさった様子でじっと観察するのだ。つついてみたり、服をめくってみたり、体をひっくり返してみたり。そうやって本当に死んでいるかどうか確かめる。
死んだふりをしている方は、だいたいこらえ切れなくなって途中で笑い出してしまう。確かめる方は死体が笑い出すまでやるのだ。
ぼくが考えて弟に教えた遊びだった。
駐車場は誰もいなくて静かだった。一台の車がスロープを上がってきて、きゅきゅっとタイヤがこすれる音が響いた。そのすぐあと、隣の通路でその車が何かに乗りあげたような音がした。何だろうと思って身をかがめて見に行った。
「あ」と思った。弟が、うつ伏せの状態で車の下に頭を突っ込むようにして轢かれていたのだ。車は左側の前輪で弟の首のつけ根を押しつぶしていた。太ももの辺りから背中にかけて轢き、そこで停まったのだ。弟はそこで死んだふりをしていたらしい。
ぼくはしゃがみ込んで弟の顔を確かめようとした。そのとき、車がゆっくりと動いて前輪が弟の上からどいた。ぶにゅっという音とごりっという音が混ざったようないやな音がして、弟の首と頭のうしろの方がつぶれた。ぼくは、弟の口から赤い泡が溢れだし、目玉が内側から押し出されるように飛び出すのを見た。
車が停まり、運転していた人がおりてきた。太った醜いおばさんだった。
おばさんは助手席側に回り込んで自分が轢いたものを見ると、はっと息をのんだ。それから殴られでもしたみたいに苦しげに顔を歪めた。
ぼくが立ち上がると、おばさんはどきりとしてこちらを見た。だけど、ぼくが子供だと分かると、まるで文句を言うように「何も見えなかったの」と言った。ぼくはふらふらと車に近づいた。足に力が入らなくて、立ち止まって少し吐いた。吐いたものがはねて靴の先が汚れてしまった。おばさんは「クソガキが」と悪態をついた。
警察が来ると、おばさんは自分こそ被害者だという顔をして罪がないことを訴えた。ぼくが轢かれた子供の兄弟だと知ると、目を合わせようともしなかった。
無残につぶれた弟を見たお母さんは激しく取り乱し、お父さんが車に連れていってなだめた。ぼくは救急車で運ばれていくまで、弟の死体を何度も見た。そうせずにはいられなかった。誰もぼくと弟が駐車場で何をしていたのか訊かなかった。頭の中がぐるぐるかき回されるようだった。
それ以来、お父さんとお母さんは目に見えて元気がなくなった。
家の中はいつも暗くて、誰も笑わなくなった。今まで言い争いなんてしたことがなかったお父さんとお母さんは、ときどき口げんかをするようになった。二人のけんかがはじまると、ぼくは

なぜか弟の上からタイヤがどくあの光景を思い出すのだった。
　何の前触れもなく思い出すこともあった。弟の顔が破裂する場面が何度もスローモーションで再生され、頭にこびりついて離れなかった。ぼくは自分の目玉が飛び出すのではないかと怖くなり、まぶたの上から両手でぎゅっと押さえつけた。
　お父さんが人が変わったようになったのは、それからまもなくのことだった。
　ときおり血走った目つきで虚空をにらみつけ、「殺してやる、殺してやる」と憎々しげにつぶやくのだ。何かよく分からないことをわめきながら家のものを壊すようにもなった。
　お父さんが暴れはじめると、お母さんはぼくを他の部屋に連れて行き「大丈夫よ」と言って抱きしめた。だけど、怖がっているのはお母さんの方だった。
　いや、ぼくも怖がってはいた。だけど、ぼくが怖いのはお父さんではなかった。ぼくが怖いのは弟だった。
　頭がつぶれて目玉がたれさがった弟が、お父さんの耳元で「殺して、殺して」と頼むようにささやいているのだ。お母さんには見えてないみたいだったから黙っていたけど、お父さんはそれでおかしくなったのだ。
　ある夜、電話が鳴った。
　電話に出たお母さんがヒステリックに「うそよ！」とくり返した。どうしたのと訊いても、お母さんは何でもないと言うだけだった。でも、手がぶるぶる震えてひどく動揺しているのが分かった。お父さんはまだ帰ってなかった。ぼくには何が起きたのか分かったような気がした。
　その夜遅く、今度は誰かがインターホンを鳴らした。
　お母さんは警戒するみたいに身を固くした。お父さんではなかった。玄関の向こうでどこそこのテレビ局のものだと名乗る声が聞こえた。お母さんは何度インターホンを鳴らされても決して対応しなかった。
　お父さんは、弟を轢いたあのおばさんを殺したのだった。
　ぼくはそれを次の日のテレビのニュースで知った。車で何度も何度も轢いたのだ。
　おばさんの体はねじ切れて、すりつぶれて、真っ赤な絨毯みたいにぺしゃんこになったという。テレビの人が、血の海、血の海と何度も言っていた。
　お父さんはその直後に首を吊って自殺したということだった。
　ぼくとお母さんは知らない街に引っ越した。
　親戚も知り合いも誰もいないところだった。お母さんは化粧品工場で働きはじめ、ぼくはその街にある学校に転入した。お母さんはお父さんのことでうそをついた。死んだとは言わず、仕事でしばらく帰ってこないと言ったのだ。
　これから二人でがんばっていこうとか、強くならなくちゃだめよとかいろいろ言ったお母さんだけど、自分は少し変になった。
　ときどき、見えない誰かに話しかけたりするのだ。相手はお父さんだったり弟だったりするように感じることもあったけど、ぼくには何も見えなかった。
　ぼくに見えるものはお母さんには見えないようだったから、お母さんに見えるものがぼくに見えないとしてもおかしくないかもしれなかった。それでもどこかで、お母さんは自分に都合のい

いものを見てるだけなんじゃないかとか、そういうふりをしているだけなんじゃないかとは思わないではなかった。
　引っ越してまもない頃から、マンションの玄関ドアを誰かが叩くようになった。インターホンを鳴らさず、直接ドアをごんごん叩くのだ。音は家じゅうに響いた。夜遅い時間にしつこく何度も叩かれることもあった。
　誰が来ても応えないことにしていたお母さんは、いつも聞こえないふりをした。ぼくも無視するように努めた。
　マスコミの人たちか、あるいはぼくの家の事情を聞きつけた誰かのいやがらせだろうと思ったけど、中に入れろと言ってるような叩き方に聞こえることもあった。もしかしたら、お父さんか弟なんじゃないかと思うこともあった。
　お母さんはお酒を飲むようになった。
　最初はこそこそしていたが、そのうちぼくの前でも平気で飲むようになった。朝から一日中飲むようになると家のことを何もしなくなり、部屋は散らかり放題になった。
　ぼくは新しい学校のクラスメイト数人を家に連れてきて、お母さんのどうしようもない姿を見せた。面白いものを見せたつもりだったけど、クラスメイトたちはやっぱり外で遊ぼうとか何か言ってすぐに出て行ってしまった。
　それ以来、学校では誰もぼくの相手をしなくなった。ぼくもそのうち学校に行かなくなった。お母さんは何も言わなかった。
　ぼくはいつも一人で過ごした。
　あるとき、神社の裏手で弱った犬を見つけた。かわいそうに思って食べ物を与えてみたけど、ほとんど手をつけなかった。もう自分で立ち上がることもできなかった。
　こいつはもうすぐ死ぬんだと思ったら、ぼくはなんだか変な気持ちになりはじめた。この犬を弟と同じ目に合わせなきゃいけないと思ったのだ。ぼくはもう一度あれが見たくなった。弟の上からタイヤがどくときのあの光景だ。
　犬をいったん社の下に隠して、道具を探しに行った。
　あちこち探して、取っ手の壊れたバケツと、口のところが割れたビール瓶と、錆びたスコップを見つけた。これだけでうまくできるかどうか不安だったけど、神社のトイレの脇のところにレンガブロックが転がっていたことを思い出した。あれは使えそうだと思って嬉しくなった。
　神社に戻ってくると、先に犬を確認しにいった。生きてるうちにやりたかった。
　ところが、犬はいなくなっていた。誰かが連れていってしまったようだった。
　ぼくはとても大事な仕事を失敗してしまったように感じて、そいつを恨んだ。集めた道具はまた使うことがあるかもしれないと思い、見つからないように別のところに隠した。
　家に帰ってみると、お母さんがキッチンの椅子に座った見知らぬ男にまたがって、変な声をあげて腰をこすりつけていた。一瞬別の人かと思ったけど、お母さんだった。
　男はだらりと垂れさがった手に酒ビンを持っていた。部屋の入口に立ったぼくに気がつくと、男はそれを投げつけてきた。
　まだ中身の残ったそのビンは、ぼくの左腕に当たって鈍い音を立て床に落ちた。中身はこぼれ

たが、割れはしなかった。一瞬間をおいてから、腕がものすごく痛くなった。
「閉めて！　閉めて！」
　お母さんが悲鳴をあげるように叫んだ。
　ぼくはまるで悪さをしてるところを見つかったような気になって、逃げるように表に出た。腕は赤黒く腫れて、しばらく動かすこともできなかった。
　男はたびたびぼくの家に来るようになった。
　そうすると、ぼくは顔を合わせないように自分の部屋にこもって息をひそめていなければならなかった。
　お母さんと男は一緒にお酒を飲んで、物を投げつけたり怒鳴ったりする激しいケンカをするのだった。そのうちお母さんのいやらしい声が聞こえはじめると、ぼくの顔はどうしようもなく熱くなった。ぼくは隠れるように布団をかぶって、じっと聞き耳を立てた。怖くてたまらないのに、股間が痛いくらいに膨らんだ。
　男が来ていたある夜中、ぼくはどうしてもお腹が空いて台所に食べ物を取りに行った。すると、リビングで消音状態のテレビを茫然と眺めていた男と出くわした。
　男は抜け殻のようだった。ぼくには男が神社の裏にいたあの犬に重なって見えた。あとは死ぬだけの、かわいそうな犬。
「なんだよ、その目つきは」
　男は言った。ぼくは何も答えなかった。
　男は突然ぼくの頭をわし掴みにすると、引き倒すようにして顔を床に叩きつけた。ぼくは鼻を強く打って、涙で何も見えなくなった。殴られ、蹴られ、踏みつけられた。抵抗してもとてもかなわなかった。ぼくは壁に投げつけられ、床に倒れた。
　そのまま動けなかった。体中がじんじん痛んだ。
　お母さんがぼくのことを見ているのが分かった。目が開かず直接見ることはできなかったけど、すぐ脇にいるのを感じることができた。でも、何もしてくれなかった。
　ぼくは床を這いつくばって部屋に戻り、ベッドに横になった。布団が血で汚れたけどかまっていられなかった。そのまま何時間も寝た。どれくらい寝たか分からなかった。
　気分が悪くなって目が覚めると、布団の中に吐いた。手の指が二本ぱんぱんに膨れあがっていた。骨が折れてるんだと思った。頭も割れるように痛かった。遠くで罵り合うような声が聞こえたかと思うと、やがていやらしい声になった。
　そうやって何度か寝たり覚めたりをくり返した。
　ふと気がつくと、ベッドの傍らに誰かが立っていた。お父さんだった。首の骨が折れて頭が横にだらんとたれてしまっていた。喉のところには、縄の跡なのか黒々とした痣が残っていた。
　ぼくは怖くて動けなかった。
　お父さんは、すうと影みたいに動くとお母さんの部屋に向かった。ぼくは布団から出てあとについていった。あちこち痛んだけど、何とか動けた。
　ドアがわずかに開いていた。
　中を覗き込むと、お母さんがあの男に馬乗りになって首に手をかけている後ろ姿が見えた。そ

の隣で、お父さんもお母さんの手を上から押さえつけるようにして男の首を絞めていた。
　男は足をばたつかせてもがいた。首を絞める手をはずそうとしたけど無理みたいだった。男は手を伸ばしてスタンドを探り当てると、それでお母さんを殴りつけた。
　お母さんは壁に倒れかかり、男はその隙にベッドから床へ転がり落ちた。男はげほげほと苦しげに咳込んだ。
　お母さんははっと我に返ったようになって、ドアの陰から様子をうかがっていたぼくに気がついた。自分が何をしたのか分からず、ひどく混乱しているようだった。お母さんは急に泣き叫ぶような声をあげると部屋を飛び出していった。
　ぼくはあとを追いかけた。
　お母さんは裸足でマンションの階段を駆けあがっていった。ぼくが階段をよろよろあがっている途中、上の方で「ひっ」と息をのむような声がした。顔をあげると、目の前の空中をお母さんが落ちていくのが見えた。
　下からどしゃっという音が響いてきた。
　熟れた果実が地面に叩きつけられたような音だった。踊り場から下を覗き込むと、お母さんがアスファルトに仰向けに倒れていた。体の下から血が流れだした。
　ぼくは下におりてお母さんに近寄った。落ちた音はかなり大きかったから、同じマンションの人が何人か出てきていたし、ベランダから覗いている人もいた。お母さんは側頭部が擦り減ったようになって、首が折れていた。足も変な風に曲がっていた。
　あの男もおりてきた。男は遠くからぼくを見た。
　ぼくの傍らにはお父さんと、弟と、それからお母さんが立っていた。ぼくたちはみんなで男をじっと見返した。男は青白い顔になって逃げていった。
　それから、ぼくはあちこちの施設を転々として過ごした。どこにいっても周りから気味悪がられ、しまいには追い出されてしまうのだった。
　最後に病院のようなところに入れられると、ぼくは他の人たちから隔離されて専用の個室に放り込まれた。窓には鉄格子がはめられ、ドアは外から鍵がかけられた。
　だけど、その部屋にいるのはぼく一人ではなかった。
　お父さんと、お母さんと、弟もいた。
　みんなぼくにまとわりついてくるけど、ぼくは一緒にいたくなかった。
　いやでいやで仕方がなくて、ときどき頭がおかしくなりそうになった。何としてでもここから出ようとして、ドアや壁に何度も何度も体当たりした。でも無駄だった。
　ぼくの体はいつも痣だらけだった。泣いても叫んでも、誰もここから出してくれなかった。
　ある朝、急に体から力が抜けていったかと思うと、目の前が真っ白になってぼくは死んだ。四十六歳になっていた。

見える人は実在するっ！　の巻

　車の戻りが遅いので、おれたちは地下の配送センターでやることもなくだべっていた。
「消えちゃったんだ」
　途中から話に加わった島田が言った。
　八階のエレベーターホールの窓辺にいる若い女のことだった。もっとも、それは高田さんだけに見える若い女だった。高田さんは自称「見える人」なのだ。
　その若い女のことは、他にこれといった話題がないときにしばしば持ち出された。ところが、高田さんによると最近彼女の姿を見なくなったらしい。
「なんで？　どこ行ったの？」
　カクやんが話の輪には加わっていなかった高田さんに問いかけた。
「それは分かんない」
　高田さんはへつらうように笑いながら近寄ってきた。四十過ぎのしまりのない体が右に左に揺れた。
「使えねーな」口の悪い百瀬さんが言った。
「男でもできたな、それは」とおれ。
「どんな女ですか」
　まだ入って二ヶ月の藤山が興味ありそうに訊いた。この職場には男しかいないから、それも仕方なかった。
「えー、若い感じのー、髪が長くてー」
　高田さんが語尾を伸ばしながら答えた。
「もういいよ」
　おれは言った。そのたいして説明になってない説明を何回聞いたか分からなかった。
「来るぅ、きっと来るぅー」
　ふざけて歌った島田に、百瀬さんが「うるせぇ」と言って丸めた軍手を投げつけた。
「定期便！」
　大塚がえらそうに車の戻りを告げた。こいつはいやな奴なのでみんなから嫌われているが、本人はまったく気づいてないのだった。
　おれたちは気だるげに仕事に戻った。
「怖いですね」
　藤山が見える人にだけ見える若い女のことを思って言った。
「こういうのは、想像力の問題だからな」とおれ。
「そうなんですか？」
「知らんけど。……違うの？」
　ここだけの話だが、八階まで荷物を上げて一人でエレベーターで下りてくるとき、その若い女が一緒に乗り込んできたのではないかと思って、おれは少し怖くなることがあるのだった。

森の中で

　蜜子は敦志と二人きりになれて嬉しかった。
　帰り道にあるその森は、子供の頃二人で一緒に遊んだことがあった。
　森の中では誰に見つかる心配もなかったから、普段教室ではどんな感情も表に出さない彼女も自然と頬が緩んだ。誰かに隠された鞄を探してすっかり遅くなった彼女に、部活あがりの敦志が一緒に帰ろうと声をかけたのだった。
　わけもなく枝や木の実を拾ったりしながら途切れがちに会話を交わし、二人は森の奥まで歩いた。気がつくと辺りがうす暗くなっていた。
　もう帰ろうと言ったとき、敦志がキスを迫ってきた。
　彼女はかすかに震えながらも黙って受け入れた。敦志がもう一度と手を伸ばすと、身体をくねらせてかわし、はぐらかすように笑った。
　まだ怖かった。それ以上に、こんなことがみんなに知れたらと考えると身のすくむ思いがした。
　二人はふざけあうように森の中を走り回った。蜜子の笑い声が森に響いた。
　どこかから鳥の鳴き声が聞こえてきた。谷に行き当たると、彼女は崖淵の木に寄り添って耳をすませた。鳴き声は谷底からするようだった。乾いた甲高い声だった。
　何の鳥だろうと思い「ねぇ」と振り返ると、敦志の姿がなかった。すぐうしろを追ってきていたはずだった。そこにはただ不気味に静まり返った暗い森が広がっていた。
　蜜子が森から出てきたのは、翌日の夕方のことだった。
　昨夜のうちに捜索願いが出されており、身柄はすぐに保護された。体の冷え切っていた彼女は、誰に何を訊かれてもただ弱々しく首を横に振るだけだった。敦志は二度と見つからなかった。
　不思議なことに、その出来事を境に蜜子へのいじめはなくなった。
　帰り道、彼女は森の中からあの鳥の鳴き声が聞こえないか耳をすませてみることがあった。そこには、まるで誰かが呼んでいるような深い静寂があるだけだった。

一人。
一人というのがいい。
それがオレの望んでいたことだと今更分かった。
連中がみんな逃げていったからそうなった。
ここにはもうオレしかいない。空の霞んだ町。
たまに勝手にやってきて、辺りをうろつきまわる連中もいる。
ここら一帯はもうオレの庭だっていう意識になってるから、オレからするとそいつらは侵入者ってことになる。だから追い出しにかかる。カメラなんか持ってる奴は最悪で、だいたい叩き壊してやる。
金ならなくはない。どさくさに紛れて手に入れたものだ。
街まで出て金を使って何か手に入れることもある。でも、置き去りにされたものをかき集めれば暮らしは何とかなる。
オレの楽しみは空になった家々を燃やして回ることだ。
火が燃え広がり、家屋全体を覆いつくし、やがて崩れ落ちる。
それをただじっと見ている。
じっと見ているうちにだんだん虚しい気分になってくる、その感じがオレはなんだか好きだ。オレにだってちゃんと感情ってものがあったんだなって思う。そんなこと、知ってたはずのことだった。
久しぶりに街まで買い出しに出たときのことだ。
どっかの食堂でかかっていたテレビを道端から見た。どいつもこいつも、まるで何もなかったみたいに呆けてやがった。
だけど、そんなの昔からそうだった。
誰も何もしてくれない。それだけが本当のことだ。
オレは毎日全身にたっぷり嫌なものを浴びている。
体の内側からも取り込んでいる。
その嫌なものを浴び続け、吸収し続けているうちに、何か巨大な化け物にでも変身しないもんかと思う。
そしたら、連中の街を破壊してやるんだ。
炎を見ながら、オレは我を忘れるほど怒り狂い、拳をぎゅっと握りしめる。
それから急に泣き出し、力が入らなくなって地べたに身を投げ出す。
そうして疲れ果てて寝てしまう。
目が覚めても一人だ。

幽霊は基本的に人の理解の枠組を超えたものです。
理解を超えたものだと本能が感じ取るので、恐怖という感情が起こります。
恐怖という感情はなかなか克服できません。恐ろしいものには近づかないというのが生物としての本能であり、また、そうしないでは生物は生き残ることができないからです。
というわけで、このことが幽霊に色々な在り方をすることを許します。
彼らの正体は、常に、掴めそうで掴めません。彼らは色々な在り方をしますが、それには人の側の都合であるとか条件によって変化するという側面もあるのです。
はっきりしているのは、幽霊というものは人に対して影響力を持つものであり、人なしには存在できないということです。
もしかしたらいるんじゃないか、もしかしたら出るんじゃないか。
人の側でそう考えることが大切です。あるいは、そう考えてしまわざるをえない状況に陥ってしまうことです。
そうは申しましても、人に恐怖の感情さえあれば、これは多少の個人差はあれど否応なく達成されてしまうことでもあります。
人は恐怖します。
怖がりの者の前には幽霊は現れやすいかもしれません。逆に、スキップしている者の前に幽霊が現れることは、まずないでしょう。
幽霊は人とその世を怨んでいると言いますが、これはある意味当然です。
彼らが「持たざるもの」であり、基本的に「人が死んだあとの何か」であることを考えれば、この関係性も少しは理解されるのではないでしょうか。
それでも、人はあらゆる面において常に幽霊の優位にありながら、彼らを恐れないわけにはいかないのです。そこには人間の現世的な価値観のはかなさという問題も見え隠れします。
幽霊に自我や主体といったものがあるかどうかも意見の分かれるところです。おそらく、死んでみれば分かることが色々あるに違いありません。
しかしながら、死んだら何も分からなくなってしまうという話にも、十分すぎるほど真実味があります。未だかつて、死んだ人からこれらのことに関する報告が何ひとつ上がってきていないことからも、死後の事情がかなり厳しいことが推察されます。
後期にひらかれるこの講座では、恐怖という感情と幽霊の関係性に焦点を当てて話を進めていきます。
幽霊とは何か。あるいは、幽霊は実在するのか。
半年の講義を通じて、幽霊というものを考えるときに一体どのような問いを立てることが有効なのかを検討していきます。
学生には、否定的にしろ肯定的にしろ、霊的な存在に積極的な関心をもつことが望まれます。ためしに死んでみてもいいという学生が現れた場合は、予定を変更して様々な臨床実験を行うつ

もりです。

エスカレーター

　複合機のコーナーは、四階の上りエスカレーターの正面にあった。
　そのコーナーで販売員を勤める新人の竹山は、エスカレーターで何度もあがってくる妙な男性客がいることに最近になって気がついた。
　その客はいつも一人だった。うつろな顔で三階からあがってくると、陰気な目つきで四階フロアを見やり、そのまま五階にあがっていくのだ。四階でおりることもあったかもしれない。あるいは、一日に二度見たこともあった気もする。
　大型家電量販店の客は非常に多い。その男のまったく印象に残らない顔立ちは、他の客たちの間にたやすく埋もれてしまうのだった。
「何か変なんすよ」
　竹山は、社員食堂で顔を合わせた先輩の亀岡に相談した。
　亀岡は、機械オンチの客をターゲットに次々と商品を売りさばくトップセールスマンで、押し売りの亀岡というありがたいようなありがたくないような異名を持つ男だった。
「何が？」
　亀岡は天玉そばを食べる手をとめもせずに言った。
「変な客がいて」
　竹山は、その若くも見えるし中年にも見える男性客について話した。
　このところ、気になってエスカレーター口をちらちら見てしまうことが多くなっていたし、直接姿を見ないときでも気配で分かるようになっていた。男が現われると、何か体が緊張し、いやな汗をかくのだ。
　つい先日の日曜日など、四階に到着して扉を開けていたエレベーターをはっと見ると、休日の買い物客でぎゅうぎゅう詰めの箱の中にやはりその男がいたのだった。
　竹山はどこか追いつめられたような気持ちになっていた。
「見るな」
　亀岡は、話を最後まで聞きもせず、むっつりとした顔で言った。彼の忠告はそれだけだった。
　それ以来、竹山は亀岡に避けられていると感じるようになった。最初は意味が分からなかった。そんな態度を取られるいわれなどないと思った。
　しかし、あるときはたと気がついた。
　その男性客は、実は生きた人間ではないのではないか……。
　根拠があるわけではなかった。
　だが、一度そう考えはじめると、それしかないように思えてきた。だから、亀岡は自分と関わらないようにしているのだ。何かあったときに、とばっちりを食わないように。
　男はそれからも頻繁に現れたが、そう気がついてしまうと亀岡に言われた通り見ないようにするしかなかった。
　春にあった新人研修で、竹山はノイローゼになって自殺した販売員がいるという噂を聞いて

いた。何年も前の話ということだったが、もしかしたら男はその販売員なのかもしれない。
　あるいは、店に深い恨みをもったまま死んだ客なのかもしれない。
　正体は知りようがなかった。
　年度が替わると、竹山は地下一階の大型家電コーナーに配置替えになった。
　男のことを意識から締め出すことにはすっかり慣れっこになっていたが、それでもどこかでほっとした。
　今でも時折、エスカレーターやエレベーターに男の姿を見かけることがあった。そんなときでも竹山はただすっと目を逸らすだけで、それ以上気にかけることはないのだった。

みんな死ぬまで

　中学二年生の女子生徒Mが首を吊って死んだ。
　その直前に、担任教師とクラスメイト全員にMからメールが届いていた。メールには動画サイトのアドレスが添えられていた。
　Mは教室で酷いいじめにあっていたが、これまで一度として抵抗を示したことはなかった。そのMから何か発せられたとなれば、いじめに積極的に関わらなかったものでも興味がわいた。メールを受信した全員が動画サイトに接続した。
　それはMが首吊り自殺をする映像だった。
　うすら寒い思いがして途中でサイトを閉じたものでも、それがどこで行われたのかはすぐに分かった。全員がよく知っている場所、教室だった。いじめの舞台となったところだ。
　Mの自殺動画はライブ中継だったが、誰一人として学校に連絡を入れたものはなかった。夜遅くに巡回の警備員が発見するまで、首を吊ったMの姿は配信され続けた。
　背景となった黒板には、何か文字がびっしりと書かれていた。しかし、動画ではぼやけてしまってうまく読み取ることができなかった。
　それは担任教師とクラスメイト全員のフルネームだった。
　もちろんM自身の筆跡によるものだ。
　そのことを知った担任とクラスメイト一同はぞっとなった。
　Mから来たメールに「みんな死ぬまで、絶対にやめない」という一文があったからだ。そこに名前を書かれたものが「みんな」に違いなかった。
　クラスメイトたちが一人また一人と死んでいった。
　自殺したもの、発狂死したもの、Mの首吊り死体の幻を見たといって心臓発作を起こしたもの、衰弱死したもの。罪をなすりつけ合っての殺し合いもあった。
　精神力が弱く、役に立たず、状況に応じて態度や考え方をころころ変える担任教師は、数名の生徒を引き連れて集団自殺した。
　Mの行為は、いじめから逃れる最終手段としての自殺というのとは少し違った。
　Mは、言わば化けて出るために、意図的に自らの命を絶ったのだ。言ってみれば、それは全員を巻き添えにするための自爆だった。
　まもなく、黒板に名前を書かれた全員が恐怖の末に死に、これである意味でお互い様ということになった。
　それで救いは何もない。

　そろそろ上映時間だから行こうということになり、ぼくは冷めたカフェラテの残りを一気に飲み干した。
　ミルクがやや多めのその液体の中に、何か小さな生き物が浮いていると気がついたときには遅かった。勢いのまま、それごと飲み込んでしまった。
　斜めに傾けたカップの中で溺れるようにもがいていたそいつは、虫の類じゃなかった。人と同じように手足が二本ずつあったようだった。妖怪だ。直感的にそう思った。妖怪を飲み込んでしまった。
　顔からさあっと血の気が引いていき、ぼくはカップを持ったまま固まった。
「どうしたの？」
　すでに席を立っていた彼女が言った。
　ぼくは突然呼吸ができなくなって、あわてて喉元を押さえた。
　んぐっ！　んぐっ！
　ん……、むっ……。気のせいだった。息はできた。
「何よ？」彼女は怪訝そうな目つきでぼくを見た。
「ごめん、大丈夫」
　ぼくは無理に笑顔になって、今の出来事を隠した。妖怪を飲み込んでしまったと告白したところで、まともに取り合ってもらえるとは思えなかった。
　ぼくらは予定通り映画館に向かった。
　映画を見ている間中、気が気でなかった。
　何度も足を組み替えたり、咳こんだりした。急に喉の奥から何かがせり上がってきたように感じて、すがりつくように彼女の手を掴んだ。
　彼女はスクリーンの方を向いたまま、ぼくの手を邪険に振り払った。
　結局、何も起こらなかった。ぼくの体にはどんな異変も生じなかった。ぼくは無事だった。
　上映後、彼女は映画に集中できなかったといって怒った。
「ごめん」
　ぼくは、体が熱っぽいような気がしておでこに手をやりながら言った。目の奥がごろごろするようで何度もまばたきをした。まだどこかに異変があるような気がして仕方なかった。
「ほんとに平気？」
　彼女は不機嫌そうに言った。
　何日か経過しても、ぼくの体には何も起こらなかった。
　体の一部が変化するようなこともなく、おかしな能力が身についたということもなかった。味覚が変わるというような些細なことさえ起こらなかった。
　何か変化があったのに自分では気づいてない、というのではないと思う。彼女はもちろん、他のみんなも以前となんら変わりなくぼくに接していたからだ。

あれは確かに妖怪だったと思う。
赤黒い肌をした何も身にまとっていない生き物が、カフェラテの中に浮いていたのだ。体長は一センチもなかったのではないか。
幻じゃなかった。口の中に液体以外のかたまりがあるのを一瞬確かに感じた。自分の歯だったなんてことはない。
どういう種類の妖怪なのかは分からない。でも、そいつは今もぼくの体の中にいるはずだ。どこかから出て行った様子はなかった。
ときどき、ぼくは調子がおかしいように感じて、どこかに異変はないか確かめる。あちこち触ってみたり、体を揺すってみたり、片足でぴょんぴょん飛び跳ねてみたり、喉を鳴らしてみたり。
そうすると、彼女が怪訝そうに言う。
「何よ？　どうしたの？」
ぼくは、異常がないことを確認すると、こう答える。
「別に。何でもない」

腫れ物

シャツの襟首のところが擦れて痛かった。
休憩時間に鏡で確認してみると、首のつけ根辺りに直径一．五センチほどの腫れ物ができていた。渦を巻くような奇妙な形のみみず腫れだった。ちりちりという痛みがあった。
屈んだ拍子などに襟元からのぞいてしまう位置にあり、見た目に気味のいいものではなかったので絆創膏を貼って隠した。
急に目が疲れやすくなった。眼球の奥の方がずきずき疼いた。
肩を揉もうとしてうっかり腫れ物に触れたら、激痛が走った。そろそろと絆創膏を剥がしてみると、いつの間にか倍くらいの大きさに膨らんでいた。渦の形はいっそうはっきりして、太くなり、一周か二周増えたようだった。
気のせいか、一瞬その渦が回転したように見えた。
熱いような疼くような痛みが、常に意識されるようになった。それでも病院で診てもらうほどとは思えなかったし、忙しくてそれどころではなかった。
職場に泊り込んだ翌朝、起きてみると目の前に白い靄が広がっていた。視力が弱って、ものの輪郭が分かる程度にしか見えなくなっていた。
心臓が脈打つのに合わせて、腫れ物がずきずきと痛んだ。痛みそのものが動いているようだった。いや、実際に皮膚の下で何かが蠢いていた。まさかと思って指先で恐る恐る触れてみると、腫れ物が反応するようにびくんと動いた。
体の中に何か得体の知れない生き物がいる。
腸がごっそり抜け落ちていくような思いがした。何とかして摘出しなければと思い、手探りでデスクからカッターを取り出した。震える手をもう片方の手で押さえつけ、思い切って腫れ物を切った。
皮膚の裂け目から何かが頭を出したのが分かった。
そいつは皮下でのたくって裂け目を内側からぐいぐい押し広げた。外界に出ようともがいているのだ。
激しい痛みに襲われ、まるで吸い取られるように全身の力が抜けていった。
立っていることなどできなかった。そいつが抜け出ていく耐え難い感覚とそれに伴う痛みは、いつまでも終わらないように思えた。
自分の中身がすべて出ていってしまったような虚脱感に襲われると、次第に意識が遠のいていった。

発見されたとき、彼は首のところから大量の血を流して倒れていた。
職場の仮眠室だった。床には蛇が這いずったような血の跡が廊下へと続いていたが、それが何なのかは不明だった。
彼は一命をとりとめたものの、生気を失ってみるみる痩せ細っていった。失われた視力が回復

することもなかった。やがて、気が触れたようになって精神病院に強制入院させられた。
　彼は、体にできものができるのを極度に恐れ、四六時中体を洗うのだった。そのせいで全身の皮膚は擦れて赤くなり、絶えずどこかから血を流していた。小康状態にあるときには、首のつけ根に残った抉れるような傷跡をいつまでも撫でた。
　針金のように痩せた彼は、暗闇を好むようになり、狭いところに身体を押し込んで眠った。移動するときも起き上がらなくなり、両手を頭の先に伸ばして蛇行運動をするようにして床を這った。
　彼は、病棟のレクリエーション室にある古い箪笥の一番下の引き出しが気に入ると、一日の大半をその中で過ごすようになった。
　やがて、そこからまったく出なくなった。
　ある朝、看護師が引き出しを開けてみると、彼は蛇がとぐろを巻いたような恰好で死んでいたのだった。

　フラれて何もかもどうでもよくなったぼくは、いったんはこれではいかんと奮い立ち被災地支援のボランティアに参加してみたのだけど、足手まといになるばかりで被災者にも「役立たず」とののしられ、もう死んでやろうと現地の山に入った。
　山に入ってみると、山に入っただけでは死ねないという冷厳なる事実に気がついた。ぼくは名前もなさそうな小川のほとりで途方に暮れて座っていた。
　ふと気がつくと、上流から靴が流れてきた。ヒールのついた女物だ。そんなこともあるだろう。ぼくは目を伏せた。
　まもなく、ストッキングが流れてきた。黒。黒か。だからどうした、ぼくは死ぬんだ。
　今度はジャケットだった。ジャケットぐらい誰でも着ている。
　だが、ぼくは薄桃色のシュシュが流れてきたのを見逃さなかった。長身で細身の女が長い髪を振りほどく姿が目に浮かんだ。
　やたらと丈の短いスカートが岸に寄せられてきたときには、ぼくは早足で上流へ急いでいた。
　誰かが、今、この上流で脱いでいる。
　あぁ、キャミソール。水に浸ってもなお濃厚な女の匂いを留めていそうだった。最後に一発という話もある。
　来た！　来ましたね。ブラがぶらぶら。Ｆカップのブラジャー。いや、あれはＧはあると見た。ジィー、カーーーーーップ！　やったぜ！
　やっべ、あと一枚しかないんじゃないの？　ぼくはいつの間にか駆け出していた。
　そして、短い橋の上に見つけたのだ。
　引き締まった長い足から、パンティをするすると脱ぐ、……河童。
　ぼくは思わず中井貴一のように言った。「カッ、パッ！」
　しかも、目を凝らしてよく見れば、……オス。
　ぼくは、傍らに落ちていた棍棒代わりになりそうな太い枝を手に取った。

「待て待てっ！　ちょっと待てっ！」
　ひびの入った頭の皿を押さえながら河童は涙目で言った。
「オレが、一体どこであんな服を手に入れたと思うんだよ？」
　ぼくは殴る手を止めて、話を続けさせた。
　河童は、ふもとの集落にフェロモンむんむんのむっちり美女が庭先で洗濯物を干しているところがあるのだと言った。よかったらその場所を案内しよう。
　フェロモンむんむんのむっちり美女。
　ぼくの脳裏に、フェロモンむんむんのむっちり美女が流し目をくれながら長い髪をかきあげ、おもむろにパンティを脱ぎさる姿が浮かんだ。白く柔らかい太もも。前屈みになったときの胸の谷間。

「よし、今から案内してやる」
　そう言った河童の目がぽややーんと妖しく光った。思わず見入ってしまうような光だった。

　ぼくは河童について山を下りた。
　その集落に行くと、いきなりそれが目に飛び込んできた。
　オー・マイ……！
　軒先にぶら下がったパンティやブラジャーたち！　フェロモンむんむんのむっちり美女の下着が一枚、二枚、三枚、あぁたくさん！
「な？」河童が言った。
　ぼくは下着から目を離すこともできず、うんうんとうなずいた。ブラジャーを頭にかぶり、パンティも頭にかぶって、フェロモンむんむんのむっちり美女と一つになってしまいたかった。
「好きにしろよ」河童は言った。
　いいのだろうかと思って、河童を見た。
　河童は促すように下あごをくいっ、くいっと突き出した。
　ぼくはおもむろに下着に近づいていった。
　吊り下げられているパンティを一枚つまんで引き寄せ、顔をうずめた。すべすべの生地が顔を優しく包み込んだ。ぼくは思い切り残り香を吸い込んだ。
　はぁぁぁぁぁ。
　脳みその中で気持ちのいいときに分泌される物質が大量に出るのが分かるようだった。フェロモンむんむんのむっちり美女のたまらない匂い。あぁ、おかしくなってしまう。
　恍惚状態となったぼくは、一枚はずしては匂いを嗅ぎながら手に集めていった。
　そのとき、誰かがぼくの肩に手を置いた。
　振り返ると、そこにフェロモンむんむんのむっちり美女がいた。
　フェロモンむんむんのむっちり美女は、ぶくぶく太って、ぶつぶつの団子鼻に腫れぼったい目をした、肌がぼろぼろの中年女で、どこかの田舎臭いおっさんのように品性の欠片もない顔をしていた。
　あぁ、あなたがフェロモンむんむんの、と思う間もなく、いきなり殴られた。
「お前か、おれの下着盗む奴は」
　なんてエロティックで刺激的！　ぼくは殴られた頬に手をやって悦に浸った。鼻血も出ていた。もっと、もっとぶって。フェロモンむんむんのむっちり美女は、自分のことを「おれ」と言うのだった。もっと、もっと……。

　……あれ？
　途端にぼくは気がついた。
　それはまったくフェロモンむんむんのむっちり美女なんかではなかった。
　ただの醜い中年ババァだった。こんなひどい顔、見たこともない。
　よく見ると、ぼくの手の中にある下着も、その顔に似つかわしいデカパンやデカブラだった。

それも、かなり使い込まれている。ぼくは、大量の生ゴミをそうとは知らずに抱きかかえていたみたいに、うわっと放り出した。
「なんだ、お前は！」
　ぼくはうろたえて言った。フェロモンむんむんのむっちり美女はどこだと思って、辺りをきょろきょろ見回した。緑色の妙な生き物が森の中にそそくさと逃げ込む後姿が見えた。
　そういうことか。
　どうやら一種の催眠状態にあったらしい。
　ぼくは状況を飲み込んだ。それから、ババァの下着に顔をうずめて思い切り匂いを吸い込んだことを思い出した。おえっ。おえーっ。
「殺すぞ」
　中年ババァは、ぼくを殴った。何度も何度も殴った。
　ぼくは亀のように丸まって「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」と謝った。
　警察が呼ばれ、ぼくは下着泥棒の現行犯で御用となった。

「河童が」ぼくは訴えた。「すべては河童が仕組んだことなんです！」
　警官は冷たい目でぼくの顔を見た。
「世の中で起きてる犯罪の半分は、河童の仕業さ」
　そう言って、まったく取り合ってくれなかった。

香田美也子が不慮の事故にあったのは、娘の容子がまだ三歳のときのことだった。
買い物に出かけたはずの美也子がやけに早く戻ったので、夫の均は玄関に迎え出て「どうした？」と声をかけた。
美也子はぼんやりした様子で「自転車が壊れた」と答えた。見ると、片方の耳からわずかに出血していた。
話を聞くと、どうやら後ろから来た車に撥ねられたらしい。
均は慌てて妻を病院に連れて行った。後頭部を強く打ったようだったが、検査では特に異常は見つからなかった。他に目立った外傷もなかった。
一日安静にしたあと、美也子は警察の現場検証に協力した。しかし、彼女は事故の詳しい状況をほとんど覚えていなかった。路肩にはひしゃげた自転車が転がっていた。
目撃者も見つからず、誰が当て逃げしたのかは分からず終いだった。
事故以来、美也子は時折激しい偏頭痛に苦しむようになった。
しばらくすると、彼女の言動がおかしくなりはじめた。
突然しゃがみ込んだかと思うと、そのまま岩のように動かなくなったり、いきなりうめき声を上げたりするようになったのだ。声をかけても上の空のときがあるかと思うと、前触れもなくヒステリーを起こしたりした。
部屋に引きこもって頭から布団をかぶったきり、一日中出てこないこともあった。
わけを聞いても何も答えないか、取り乱すかするだけだった。
事故の後遺症ではないかと疑った均は、嫌がる美也子を病院に連れて行って再検査を受けさせた。結果はやはり異常なしだった。躁鬱病のような精神疾患でもなかった。
以前と何ら変わりなく気持ちが安定していることもあった。しかし、ふとした拍子におかしくなってしまうと、もう手に負えなかった。時間も場所もお構いなしだった。
均は、そのような妻にまだ幼い娘の世話を任せることができなかった。かといって、仕事も疎かにできなかった。彼は勤めている食品卸会社で昇進したばかりで、ホテルや大手スーパーといった大口の契約を任されていた。
仕事でも家庭でも気を抜くことができない生活をしばらく続けたあと、均は妻と別れる決意をした。美也子の変調は原因不明で、対処のしようもなければ、よくなる見込みもなかった。これ以上は限界だった。
均は娘の親権を主張した。美也子に子育てができるとはとても考えられなかった。しかし、弁護士を交えての話し合いの結果、親権は美也子のものとなった。病院での検査で異常が認められなかったことが彼女にとって有利に働いたのだ。
均はそれ以上事を荒立てなかった。彼はおかしくなった妻の相手に疲れ果てていた。幼い容子にはまだ何も理解できなかった。
二人きりとなった母と娘は、それまで住んでいた借家を引き払い、同じ横須賀市内の市営住宅

に引越した。
　美也子は、短大を卒業してから出産するまで勤めていた会社から伝票整理と書類作成の仕事を委託で引き受けて、主な収入とした。
　娘である容子には、おかしくなる前の母の記憶はなかった。
　物心ついた頃には、母はすでに奇行癖のある人物だった。美也子は団地内でも一種の奇人扱いをされており、他人からの同情と軽蔑の入り混じった視線は娘にも向けられた。
　容子は、ひどく怯える母親に布団の中で抱きすくめられ、息苦しい夜を過ごしたことを覚えていた。「あいつらがいる」と美也子は震える声で言ったのだった。「誰？」と問うと、美也子はただ「見ちゃだめ」と答えた。
　容子には訳が分からなかった。しかし、母の緊張と恐怖は娘にもそっくり移った。
　容子は毎晩のように恐ろしい夢を見るようになり、しばしば小便を洩らした。すると、情緒不安定の美也子はヒステリーを起こし、娘を折檻するのだった。
　そのくせ、自分が怯えているときは娘しか頼るものがないとばかりに、すがりつくように抱きしめた。
　娘には母親が何に怯えているのか一向に分からなかった。彼女は、母親の緊張が伝わってくると歯をきつく食いしばるようになった。
　やがて、容子自身も近所の子供たちから敬遠されるようになった。
　幼稚園では問題児と見なされ、一度などある女の子の耳を引きちぎろうとした。
　小学校でも孤立した。容子は母親のいる家に帰るのがいやで、いつも道草をした。神社や寂れた公園で昆虫を捕まえては時間をつぶした。捕まえた虫を小川に捨てて、溺れるのを観察するのが好きだった。
　中学生のとき、容子は母親との生活にたまりかねて家出をした。
　他にあてもなく、父親である均のもとへ行った。
　均と美也子が別れてからおよそ十年、父と娘は一度も会っていなかった。それでも誕生日にはいつもプレゼントが届いていた。毎回必ず手紙が添えられていたが、容子は一度も返事を書いたことがなかった。
　手紙にあった戸塚の住所を訪ねてみると、知らない女がいた。
　均の再婚相手だった。女は希実といった。
　彼女は容子を招き入れると、均が仕事から帰るのを待つように言った。容子は、一目見た途端その女が気に入らないことが分かったが、ひとまず従った。
　均の帰りを待つ間、容子は二人の馴れ初めを聞かされた。
　出会いは希実が勤めていた横浜のスナックだった。離婚して一人になった均と、その仕事を続けるかどうか迷っていた希実は、知り合ってすぐに一緒に暮らしはじめた。「お互いに淋しかったのね」と希実は言った。
　最初は二人とも籍を入れるつもりはなかった。しかし、数年して思いがけず子供ができたとき、やはり籍を入れることに決めたのだという。
　均と希実の間に生まれた子供は女の子で、名前をなつみといった。すでに四歳になっていた。

容子にとって、十歳年下の異母姉妹だった。
　帰宅した均は、唐突に訪ねてきた容子に驚いた。再婚の事情を説明してなかったことに気まずさを感じたが、やはり娘に会えて嬉しかった。
　均と希実の話し合いによって、容子はしばらく均のところで暮らすことが決められた。
　均はかつて娘を見捨てたことを今でも後悔しており、何とかしこりを解消したかった。美也子に連絡を入れると、彼女は「勝手にしろ」と投げやりに言っただけだった。
　一方、容子はこの家に来てみて初めて気がついたのだが、父親のことなどほとんど覚えていなかった。彼女は父親に対してどんな親しみも感じなかった。ただ、居心地の悪さを感じるばかりだった。
　なつみが無邪気な様子で遊び相手になってほしそうに近寄ってくると、容子は言いようのない不快感を覚えた。何も知らずに幸福そうにしているのが許せなかった。
　容子はなつみをいじめた。物陰を指して「ほら、あいつらがいる」と耳打ちしては、わけもなく怖がらせた。
　二人で留守番をしていたとき、容子は「あいつらと一緒に閉じ込めてやる」と言って、洗面所の足元についた狭い戸棚になつみを閉じ込めた。均と希実が帰宅して気がついたときには、なつみは脱水症状を起こして意識を失っていた。
　そのことがあって、容子は家を追い出されることとなった。
「できるだけのことはしたんだ」均は最後に言った。
　離婚当時のことの言い訳だったが、容子には何も響かなかった。
　美也子の元に戻った容子は、中学を卒業すると定時制高校に入学した。
　その頃になると、容子の不器量さはいよいよはっきりしてきた。
　彼女は太っていて、いつも仏頂面で愛想がなかった。毎日同じ服を着て、格好もみすぼらしかった。話しかけられてもまともに返事を返すことはなく、誰とも打ち解けなかった。
　入学するとすぐにアルバイトをはじめた。家にお金を入れるように言われたこともあったが、家にいるよりはましと思ってのことだった。
　陰気な性格のため接客業は向かず、コンビニやファーストフードはすぐにクビを言い渡された。それでも駅地下の土産物屋とスーパーの品出しはいくらか続いた。
　学年が上がると、年齢を偽って風俗店でも働いた。しかし、客に不評でわずか一日でやめさせられた。
　アルバイトをはじめては解雇されるのは、単に仕事内容が合わないからだけではなかった。彼女に盗難癖があり、店の商品や売り上げ、同僚の私物にちょこちょこと手を出すからだった。
　現場を押さえられることはなくても、彼女は常に周囲から疑いの目で見られた。それでも本人は悪びれることはなく、遠まわしに責められても素知らぬふりで通した。
　母の美也子は、いつの頃からか飲酒癖がついていた。彼女は娘の学業にも普段の素行にもまったく関心を示さず、容子が何をしようと口を出すことがなかった。
　美也子は、今でも一人で恐怖に震えていることがしばしばあった。酒はそもそもそうした恐怖や緊張を紛らわせるためのものだったが、今では気分が安定しているときでも彼女は無気力や絶

望感にとりつかれたようになっていた。
　容子がある程度の年齢に達すると、母には普通の人間には見えない何かが見えるのだとうっすら理解するようになった。とはいえ、容子自身にはそんなものは見えなかったし、何より母親のことを憎んでいた。自分の人生が八方塞なのは、すべて母親のせいだと感じていたのだ。
　母が恐怖に身を強張らせているのを見るたび、容子は死ねばいいのにと思うのだった。
　それでも母親のことを考えたことがないわけではなかった。
　一度、スーパーのアルバイトで知り合ったパートの主婦が、霊媒師を紹介すると言ってきたことがあった。その主婦は、事故にあっておかしくなる前の美也子を知っており、容子と年の近い息子がいた。
　主婦が、美也子がおかしくなったのは悪霊にとりつかれたせいだと断定するようにしつこく言うと、容子も次第にその気になった。
　ある休日、その主婦が個人的な知り合いだという霊媒師を伴って、美也子と容子の住む市営住宅を訪れた。
　最初に除霊費を払うよう主婦から聞かされていた。特別に割引きしてくれるということだったが、実は普段の値段と変わらなかった。そのうち何割かが主婦にわたる話になっていただけのことだった。容子は八万円を自分の財布から支払った。
　霊媒師は五十歳前後の生え際の後退した意地汚そうな男で、派手な袈裟に足袋を履き、片手に数珠を握りしめていた。容子が謝礼を包みもせずに渡したので、彼は顔をしかめた。しかし、結局黙って受け取ると懐にしまいこんだ。
　霊媒師は部屋をじろりと睨むように見回すと、誰にともなく頷いてみせた。主婦はうしろで控えるようにして立っていた。
　昼間から酒を飲んで寝転がっていた美也子は、焦点の定まらない目でいかにも胡散臭げに彼を見た。男に近寄られると、彼女はようやく警戒して身体を起こした。
　霊媒師は何の前置きもなく、数珠を持った手を合わせて念じるように目を閉じた。
　美也子が起き上がろうとすると、霊媒師は主婦に「押さえて！」と語気荒く命じた。
　主婦は言いなりになって美也子の後ろに回り込み、肩を押さえつけた。美也子が逃れようとすると、主婦は「じっとして！」と言って羽交い絞めにした。
　霊媒師がぶつぶつと何か唱えはじめると、美也子は気味悪がって足をばたつかせて抵抗した。「手伝って！」主婦は命じるように容子に言った。
　容子は状況にのまれ、言われるままに美也子の足を押さえつけた。八万円も払ったのだから何か効果があるはずだと思った。
　美也子は身体をよじらせて大声でわめき、ひどい言葉で娘をなじった。容子は言い返すように「うるせぇ、妖怪ばばぁ！」と口汚く罵った。
　主婦は二人を諌めようとやはり大声を張り上げた。その目はらんらんと輝くようだった。
　霊媒師もかき消されないように大きな声で念仏のようなものを唱えた。
　霊媒師と主婦が帰っていくと、美也子も容子もぐったりとなった。二人の間には何か冷え冷えとしたものが残った。美也子は「詐欺師が」と悪態をついた。

しばらく経っても除霊の効果らしいものは現れなかった。主婦はしつこく美也子の様子を聞いてきたが、容子は彼女を無視した。
容子は、定時制高校を卒業すると家を出ることにした。
美也子には何も言わせなかった。もう二度と戻るつもりはなかったし、母を捨てることに何のためらいもなかった。
アルバイトで貯めたお金を元手にして、新宿からほど近い中野坂上というところに安い部屋を借りた。
すぐに仕事を探しはじめたが、高校で取得した簿記の資格は何の役にも立たなかった。
クリーニング店、ホテルの客室清掃、郵便物の仕分けなど仕事を転々とし、やがて化粧品の検品の仕事に落ち着いた。
黙々と単純作業をこなすだけの仕事だった。職場の休憩室や、行き帰りの電車で棚に置き去りにされた雑誌や新聞を拾って読むことが、唯一の楽しみだった。
ときには、同僚の私物を盗むこともあった。容子は中に何が入っているか分からないポーチや手帳の類を盗むのを好んだ。
品川からの仕事帰り、彼女はいつも新宿で安い喫茶店に寄った。カウンター席に座って、その日拾った雑誌を読んだり、盗んだものを検めたりするのが日課だった。
例えば手帳を手に入れると、それを隅から隅まで舐めるように読んだ。収穫が何もないときは、身じろぎもせずに一時間ほどじっと座っているのだった。
職場でも日常生活でも、他者との交流は一切なかった。
一人暮らしをはじめてから数年が経ったある日、彼女は石崎亨とばったり会った。
仕事帰りのことだった。新宿駅構内で柱に寄りかかっている彼の姿が目についたのだ。彼の方でも容子に気がつき、例によって卑屈そうにニタニタ笑いながら近づいてきた。片方の耳がつぶれ、同じ側の足をわずかに引きずるようにして歩く薄気味悪い男だった。
石崎亨は、その数週間前に容子の職場に入った新人だった。しかし、一週間も勤務しないうちに来なくなり、そのまま辞めていた。
彼のことを覚えていたのは、勤務中に尻を触られたことがあったからだった。挨拶を交わしたことさえなかったが、容子はそうした近づかれ方に抵抗を感じなかった。むしろ、どこか自分と似ているものがあるように感じたほどだった。
亨は何を言うでもなく、容子と並ぶようにして歩きはじめた。
容子が丸ノ内線の改札を通ると彼もあとをついてきた。容子がホームに立っていると彼はその斜め後ろに立った。電車がやってきて容子が座席に座ると、彼はその前に立って吊り皮に掴まった。
亨は棚に漫画雑誌が置き去りにされているのを見つけると、それを取って無言で容子に渡した。容子は中野坂上までのほんの二区間、それを読んだ。
二人は電車を降りるまで一言も言葉を交わさなかった。
容子が中野坂上の駅で降りると、亨もついてきた。
容子はやや速度を速めて歩いた。亨は置いていかれそうになると、片足を引きずりながらのや

や滑稽な恰好で小走りになった。
　彼の片足が不自由なのは、子供の頃に交通事故にあったからだった。その足のせいで学校でもいじめにあった。片耳がつぶれているのもいじめが原因だった。卑屈そうにニタニタ笑う彼の癖は、いじめられているうちに染みついたものだった。
　亨は容子のすぐ後ろを歩くと、彼女の尻を触った。
　容子が仏頂面で振り向くと、彼はまたニタニタ笑った。
　二人は、下り坂の途中にあるファミレスに入って一緒に夕飯を食べた。
　亨は、一週間もやっていない化粧品の検品の仕事について愚痴を言った。
　毎日ひげを剃らなきゃいけないのがいやだ。作業着に着替えるのが面倒くさい。ロッカーが狭い。時間に厳しい。やたらと口うるさい奴がいる。
　そこで数年働いている容子だったが、職場に文句をつけられても気にはならなかった。
　亨はそのまま部屋までついてきた。
　その夜、二人は同じ布団に入った。亨はうしろから容子の身体をまさぐり、彼女の尻に股間をこすりつけた。容子はされるままになった。しかし、どちらも途中で気持ちが萎えてしまって、行為は最後まで至らなかった。
　現在求職中だという亨は、そのまま容子の部屋に転がり込んだ。彼は、西新宿に借りていた部屋を家賃を四か月分滞納したまま引き払った。
　容子が男と付き合うのは、亨が初めてだった。
　彼は仕事もろくにせず、家事もほとんどできなかったが、かまわなかった。
　容子は二人分の食事を作り、洗濯もした。夜はスナック菓子を食べながら一緒にテレビを見た。
　休日には映画館に出かけ、劇場の暗がりでお互いの身体をまさぐりあった。そのままホテルに入ることもあったが、相変わらず行為を最後まで遂行することはできなかった。
　手癖の悪さは亨も同じだった。ディスカウントストアに行って役に立つわけでもないものを万引きするのが二人の楽しみだった。
　亨の主な職歴は、パチンコ店、ピザの配達、キャバクラの呼び込み、ティッシュ配り、牛丼屋などだった。いずれも半年以上続いたためしがなかった。
　仕事がなかなか決まらないのは、高校中退という学歴と、窃盗と住居侵入という二つの前科によるところが大きかった。
　十六歳で高校を中退した彼が持っているのは、原付の免許だけだった。
　高校は学業不振と不登校で辞めたのだった。もともと他の生徒たちから疎まれる存在だったが、ある女子生徒の体操着を盗んだところを見つかってからは露骨に気味悪がられるようになった。
　亨は時折三鷹の親元に帰ることがあった。金をせびりに行くのだった。
　彼の両親は、三人兄弟のうちで例外的にできの悪い一番下の息子を完全に見放していた。彼らはこれまでも、この三男がマルチ商法に手を出したり、自己啓発セミナーに入れ込んだりするたびに散々迷惑をかけられていた。

亨が実家に顔を出すと、彼らはお金をいくらか渡してさっさと厄介払いをするのだった。上の二人の兄弟はすでに自分の家を持っていた。
亨はもらった金を持って一人で遊びまわり、容子のところへ戻ってくるときにはほとんど何も残らなかった。
ある休日、容子は買い物帰りに通りかかった公園で、赤ん坊がベビーカーごと置き去りにされているのを見つけた。
生後三、四ヶ月の赤ん坊でよく寝ていた。近くには誰もいなかった。
容子はベビーカーから赤ん坊を抱き上げると、そのまま何事もなかったかのように立ち去った。誰にも見咎められなかった。
アパートに連れ帰ると、まだ寝ている赤ん坊をひとまず部屋の真ん中に寝かせた。男の子だった。容子は先に洗い物を済ませることにした。台所にゴキブリが出たので、手で掴んで窓から投げ捨てた。
気がつくと赤ん坊は目を覚ましていた。物珍しげに部屋を見回したが、泣きはしなかった。
赤ん坊をあやしているうちに、亨が帰ってきた。
彼は赤ん坊を見ても何も言わなかった。ニタニタ笑いもせず、近寄ろうともせず、ただ疎ましそうに見ながら部屋の隅に座り込んだ。
容子はその反応に少しがっかりした。
赤ん坊が泣き出すと、亨は顔をしかめて再び出て行った。
赤ん坊はおっぱいがほしいようだった。容子は薬局へ必要なものを買い出しに行った。赤ん坊は泣いてうるさいので部屋に寝かせたままにした。亨は夜遅くまで戻らなかった。
翌日、容子は仕事に出なければならなかった。そのため、赤ん坊のミルクとオムツの交換を亨に頼んだ。
亨は横目に赤ん坊を見たまま黙って頷いた。手順などについて説明を受けても、彼の頭には何も入っていなかった。
亨は行き当たりばったりに赤ん坊の世話を焼いた。泣きやまなかったり、見るのもいやになったりしたら、ほったらかしにして外に出た。そうすると、牛丼を食べたりパチンコをやったりしてしばらく戻らなかった。
容子が仕事から帰ってくると、亨はすぐにまた部屋を出て行った。室内は散らかっていて赤ん坊の嘔吐物や便が臭った。
そのような生活を三日続けた。
四日目に容子が仕事から帰ってくると、部屋には亨はいなかった。赤ん坊が裸のまま便まみれになって泣いていた。
夜中に赤ん坊の泣き声で起こされたときも、彼はまだ戻ってなかった。もう帰ってこないつもりなのだと気がついた。
翌朝、容子は仕事に行くつもりで赤ん坊を連れて部屋を出た。しかし、駅に着いたところで、このまま職場まで連れて行けるはずもないと思い直した。
あてもなく公園に来るとベンチで一休みした。赤ん坊をさらった公園だった。

赤ん坊の母親に見つかってもかまわなかった。しかし、午前中の大半をそこで過ごしたものの、彼女の存在を気に留めるものは誰もいなかった。
仕方なく赤ん坊を連れたまま部屋に帰った。
容子は途方に暮れた。赤ん坊の世話はすでに手に余りはじめていたし、飽きはじめてもいた。亨の携帯に何度連絡を入れても、返事は返ってこなかった。
その翌日、容子は彼が彼女の通帳とキャッシュカードを持ち去っていたことに気がついた。
彼女は無一文になった。
仕事に行く気力も、赤ん坊の世話をする気力もなくなった。
職場から電話がかかってきても取らなかったし、赤ん坊をかまうこともしなかった。ミルクを飲ませず、オムツも換えなかった。泣いてもほったらかしにした。
赤ん坊は泣き声がじょじょに弱まり、衰弱し、数日のうちに死んだ。
名前をつけることもないままだった。
容子は死んだ赤ん坊をどうしていいか分からず、ひとまず冷蔵庫に入れた。その二日後、燃えるゴミの日に捨てた。
彼女が赤ん坊をさらい、死なせたことは、誰にも気づかれなかった。やろうと思ってやったことではなかった。しかし、誰にも知られてはならないことだとは彼女にも分かっていた。
容子は仕事に復帰した。人手不足もあって、数日間無断欠勤したことは不問とされた。
以前と何も変わらなかった。容子に関心をもつ者は一人としておらず、彼女はいつも通り黙々と仕事をこなし、物を盗み、帰りに喫茶店に寄った。
ところが、まもなく朝起きるのが億劫になりはじめた。
身体がだるくて出かけるのもつらくなり、支度にいつまでもかかった。ようやく電車に乗ると、今度は降りる気力がわかなかった。座席にぼんやり座ったまま、周回する山手線にいつまでも乗ったままでいることもあった。
職場にたどり着いたとしてもミスばかりした。頭が重く、自分が何をしているのか、自分の身に何が起きているのか、考えることもできなかった。
結局、仕事はクビになった。
次の仕事を見つけるような気力はとてもなかった。
やがて、家賃を滞納して部屋にもいられなくなった。
仕方なく母の元へ帰ることにした。家を出て以来、すでに七年の月日が経っていた。
美也子は横須賀の市営住宅に住み続けていた。
容子はまだ持っていた合鍵で玄関を開けた。
相変わらずの散らかりようだった。まるで七年前に出て行ったときのまま時間がとまっていたかのような錯覚を覚えた。
美也子は、座卓でカップ酒を飲みながら、ぼんやりとテレビを見ていた。寒くもないのにくたびれた服を重ね着し、髪の毛は何週間も櫛を通していないように見えた。
容子には、母が以前と変わらず周囲から孤立し、何かに怯えて生きているのが分かった。今更ながら哀れに思った。

声をかけようとすると、美也子が気配を察して振り返った。
美也子の表情は途端に険しくなった。
「来るなっ」彼女はとげのある声で言った。
容子はびくりとして立ち止まった。
美也子は、数年ぶりに再会した娘に少しも顔を緩ませなかった。彼女は怯えと憎しみの入り混じった目で警戒するように娘を見ると、やがて言った。
「赤ん坊がいる」
容子はぞっとなって立ちすくんだ。
このとき初めて、母には普通の人間には見ることができない、この世ならぬものを見ることができるのだと真の意味で理解した。同時に、このところの不可解な体調不良は死なせた赤ん坊のせいだったのだと悟った。
容子には何も見えなかった。だが、あの赤ん坊が近くにいて自分を責めるのをはっきりと感じることができた。
それでもそのことを認めるわけにはいかなかった。そうすれば、母への憎しみの根拠が揺らぐこととなった。この母親が不幸だというなら、自分はどうなるのだ。
容子は、目の前にいる母親からすべての不幸がはじまったのだと思いなした。
この女こそ、すべての元凶なのだ。
この母親さえいなければ、自分は今のような自分になることはなかった。この母親さえいなければ、もっとまともな人生を送ることができた。この母親さえいなければ、あの赤ん坊を殺すこともなかった。
この母親さえいなければ、この母親さえいなければ。
容子は頭の中で繰り返しながら、母に近寄った。
「来るな！」
美也子は恐怖に身を硬くして言った。
容子は止まらなかった。
やり直すことはできなかった。何もかも手遅れだった。この母親さえいなければと思いながら、彼女は母親にのしかかり首に手をかけた。
数週間後、市営住宅の一室から腐臭がするという通報があった。
警察が調べたところ、室内から二つの遺体が発見された。
一体は初老の女性で絞殺されたものらしかった。もう一体は若い女性で、衰弱死したものということだった。

収録されているすべての作品より長くなってしまうという、異例の事態が勃発しているあとがき

この『足のうら怪談・全』は、以下の三冊の掌握集を一冊にまとめたものです。

『足のうら怪談　魚の目』　　（二〇一〇年十二月発行）
『足のうら怪談　土踏まず』　　（二〇一二年一一月発行）
『足のうら怪談　メラノーマ』　（二〇一四年十二月発行）

およそ二年に一冊ペースでこうした冊子を作っていることになります。
各冊子ともおかげさまで好評で、在庫を切らしてしまったり残りが少なくなったりしています。そうしたこともあり、このたび『全』として一冊にまとめることにしました。
ここには三冊の掌握集に収めた作品を、順番を並べ替えることなくそのまま収録しています。加筆はほとんどしていませんが、校正は改めてしました。
二〇〇九年から二〇一四年にかけて書いた全四十三タイトル、原稿用紙で二、三枚のものから一番長いもので三〇枚程度です。執筆時期などについては、詳しくは初出一覧にまとめてありますのでそちらをご参照ください。
私は短いものを書くのが好きですが、現在のいわゆる商業出版の世界において、一人の書き手による掌握ばかりを集めたものが本にまとまるということはまずないと言っていいでしょう。やろうとするなら自分でやるしかないということになります。
というわけで、この本は私が自分で作ったものになります。
自分でやることの最大の利点は、好きなようにやれるということに尽きます。
書きたいことを書き、載せたいものを載せることができる。タイトルも表紙デザインも好きに決められる。
小説に限らず、商業主義の世界ではこういうことはなかなかできません。あたかも好きなことを好きなようにやってるふりをしてる人はいるかもしれませんが、それは大抵その方がカッコよく見えるという理由によるものだと思っていいでしょう。
小説というのはどこか高潔ぶるというか特殊ぶるところがあるので、それが商業主義だと聞くと意外に思う人もいるかもしれません。しかし、実はそうなのです。
本を作るのには決して少なくない費用がかかります。また、編集者、校正者、装幀家、印刷業者など様々な専門家が関わります。出版社は制作資金を出し、制作状況を管理し、商売として出版ということをやっているのです。そこまで実情に詳しいわけではありませんが、基本的にはそんな感じのはずです。
このような理解はあまりされないかもしれませんが、本というのは著者の作品であるというのと同時に、出版社の商品でもあるのです（とはいえ、内容がつまらなかったときや売れなかったときに出版社が責任を取るかどうかは分かりませんが。現実には著者がお払い箱になるだけのような気もします）。

自分でやることのデメリットというか大変な点は、編集や校正やデザインといった制作面の作業から、印刷製本の発注、営業、そして販売という流通に関わる部分まで、すべて一人でやらなければならないという点です（この本に関しては、デザインをいつもお世話になっているテンテツキに、カバーイラストを拙著『余裕の暮らし』でも描いていただいた漫画家のあらいあきさんにお願いしました）。

これにはかなりの時間と労力、そしてそれなりの費用がかかります。

もちろん、作った本を販売すれば費用はある程度回収できるかもしれませんが、出版というのはたくさん刷って安く売るという薄利多売が前提となっている事業です。すべて一人でやって割が合うように成立させるというのは、土台無理な話です。

何度か自費で冊子を作った経験から、それなりの手応えは感じています。しかし、それが時間や労力、そして費用に見合ったものであるかどうかというと、何とも言えない部分もあります。自己満足的な側面がないとは言えないでしょう。

それに加えて、こうしたものはあくまで自分で勝手にやっていることであって、世の中からどんな承認を得たわけでもないということがあり、その部分で個人的にひっかかりは感じます。

今の時代、つまらないしがらみにとらわれずに好きにやった方がうまくいくし、面白いものができる、という話はなくはないような気もします。特に、不況が言われて久しい出版界の現状というのは、どうにもならない閉塞感があるようです。

雑誌や書籍など出版物の総売上額は一九九七年以降、右肩下がりに落ち続けています。だからこその「出版不況」というわけですが、そんな中で二〇一四年上半期の総売上額が前年度比で５．９％ダウンとなりました。

これはとんでもなく大幅な減少と言っていいと思います。

四月からの増税の影響があるとはいえ、一九九七年から落ち続けていて不況だ不況だと言っているところにその数字です。まだそこまで落ちる余地があったのかという、変な驚き方さえしてしまいます。

簡単にデータでやりとりできてしまうものが今どき有料で売れるはずもないという問題も決して無視できないことだとは思いますが、私なんかはこの数字を見て、まず率直に「ああ、出版というのはもう本当にだめなんだな」と思ったりしました。

皆さんはどうお感じになるでしょうか（出版といっても小説以外にもあるので、簡単に「出版＝小説」と混同してはいけませんが）。

こうしたほとんど首が回らなくなっているといってもいいような厳しい状況の中で、商業出版というものにこだわっても、わざわざつまらない足枷を増やすだけなのかもしれません。

ジャンルに関わらず、自分からどんどん発信していくというのが近年の風潮であり、若い人のやり方かもしれません。しかし、私は世の中からの承認がどうとか、そういう面倒くさいことを考えてしまう性質なのです。「認められたい」というのは少し違います。言葉で言うのなら、むしろ「認めさせたい」です。

世間なりの基準にこちらが合わせるのではなく、こちらの基準を世間なりに認めさせなければならないと、私はなぜか昔からそのように思っていました。

まぁそれはどちらでもいいのですが、その「認められた」なり「認めさせた」状態というのは、端的に言えば「プロ」であるということになります。つまり「仕事として書くこと」。そして、書いたものが「商業出版される」ということです。

ですから、ひとまずはそういうものを目指しはします。

私は十佐間つくお名義で単著を一冊出版したことがありますが、これは私が賞をいただいたある文学賞の「主催組織が費用を全額負担する形での自費出版」という、ちょっとややこしい説明が必要な困った形式でした。制作過程は商業主義的でしたし、著者である私は一銭も出してませんが、形式上はあくまで「自費出版」だったのです。

また、この『足のうら怪談』シリーズで使っている庵堂ちふう名義でも商業誌に掲載されたことはありますが、それはいずれも八〇〇字の掌握でした。

これらの実績からでは胸を張ってプロだとは言えない気がするのです。

小説というのはプロ・アマが割合はっきり区別されている世界ですが、そういう区別があるならまずはプロにさえなれないようではどうにもならないだろうと個人的には思いはします。

ですが、現在の出版界というのは、前述したようにピンチに瀕しています。年を追うごとにピンチの度合いが深まっているということが数字にも表れています。

そういう業界に人は（特に若い人は）そうそう魅力を感じないだろうというのも一つ言えることでしょう。というか、本当のところ、私自身が日本の出版界（この場合は特に小説界のこと）にあまり魅力を感じていないというのが本音です、などとはっきり言ってしまっていいものかどうか分かりませんが、本当なので言ってしまいます。

これはきわめて個人的な問題ですが、私のようなマイナーな感性の書き手を（と自分で言うのもなんですが）、Ｖ字回復に劇的に効く特効薬を欲しているような不況業界が温かく迎えてくれるとは思えない、ということもあります。

「すでに小説そのものがマイナーなんだから、さらに感性がマイナーときたら（客が）誰もいない」というのも理屈と言えば理屈です。というか、これはそこそこにえらいと思われるある編集者が、実際に私に言った言葉だったりします（その人はさっさと出版業界を去りましたが、これは見方によっては賢明な判断ということになるのでしょう）。

この言葉は、私が自分なりの感性に従ってどんなに面白いものを書いたところで、売れる見込みがないから出版社から本が出ることはないということを示唆してたりします、ええ。

小説というのはとにかく「きちんとしてること」が大前提のところがあるというか、ただでさえマイナーとかＢ級Ｃ級とかアングラとかへたウマとかカルトとか異端とか称されるようなセンスが入り込みにくいところがあると私なんかは思います。もしかしたら、単に今っぽいというのさえだめな場合があるかもしれない。

私は自分の小説について説明するのに「漫画でいうところのガロ系みたいな」と言うことがありますが、「は？」という反応が一番多いです。それから「あぁー」という曖昧なうなずき。あまりうまく伝わりません。そもそもガロ系というのが、現在そう使う言葉でもないでしょうし、分からないという人も多いのかもしれませんが。

また、「言葉で描いた漫画というか」などと説明を試みることもありますが、これもそうウケ

のいいものだという気は本人はしてません。
　私だって別に自分の書いたものが大ヒットするなんて夢を見ているわけではありませんが、でも潜在的な読者はそれなりにはいるだろうとは思ってます（分かる人には何も説明しなくたって分かるのです。分からない人だけがそれを不思議に思うのですが）。
　ですが、現在の出版社には潜在的な読者を探している余裕もなければ、採算が合うかどうか見通しの立たないものにトライしている体力もないのです。
　本当は「認めさせたい」などと雄々しいことを言うより、「認められたい」という思い方をしている方が、状況にはずっとマッチしているのかもしれません。まぁその方がかわいげがあると言えるでしょうし、生意気な人間はどのジャンルでも嫌われます。
　好きなように書いていたのでは（「自分の信じる文学を追及する」などとも言います）、道は開けないかもしれない。だがしかし、仮に状況の方に合わせていったとして（「傾向と対策を練る」などとも言います）、はたして自分が楽しめるのかどうか。そして、自分が楽しんでないものを読み手が楽しんでくれるかどうか。
　ジレンマに陥るばかりです。
　自分がさして魅力を感じてない世界で、プロデビューすることを目指し、本意ではない方向転換をすることで、首尾よくそれが果たせたとして、いったいそれが何だというのか。しかも、その業界はまったく先行きが怪しいときている。
　そんなことやっても不毛なんじゃないか。こうした思いは拭いきれません。
　それでも私がプロというのにこだわるのは、自分が触れてきた小説の多くが、いわゆるプロの小説家が書き、商業出版されたものだということがあるからです。実際には、状況に合わせて書くことなり書き方なりを変えたという人だっていくらもいます。
　それなのに、どうして自分だけがしがらみにとらわれず好きに書くことができるなどと虫のいいことを言えるのか。「時代が変わった」の一言で煩わしいものを何でも振り払ってしまっていいようには思えません。
　思えませんがそれにしても……、というところなのですが。
　現在、書き手や書き手志望者の多くの方が、似たり寄ったりの悩みを抱えているのかもしれませんが、私もいつもどうしたものかと思いながら、はっきりとした決断が下せないまま、一方で公募に出し、もう一方で自費でやりたいことをやる（私家版を作る）という両方をやっている状態です。
　小説は商業主義だと言いましたが、単に「小説」とか「出版」というとき、それは基本的に「商業出版（された小説）」のことを指します。案外言われないことですが、よく考えてみるとそうだということが分かると思います。だからこそ、自分でお金を出して作る「自費出版」とか「私家版」という言葉が別にあるわけです。
　映画においても似たような事情があります。単に「映画」というとき、それは基本的に「商業映画」のことを指しています。資金を制作会社なりスポンサーなりが出して作る映画のことです。そして一方に自分（たち）でお金を出して作るところの「自主映画」というものがあるわけです。

小説というとすぐに「純文学かエンターテイメントか」という話になり、その前段階に注意がいきませんが、小説というのは純文学にしろエンターテイメントにしろ商業ベースでやられているものです（現実に採算が取れているかどうかはまた別の話です。どういう前提に乗っかってるのかが大事なのです）。

だからこそ、そこはプロ・アマがはっきり区別されている世界なのです。

よく「小説家になることより、小説家であり続けることの方がはるかに難しい」とか「大事なのは書き続けることだ」などと言います。こうした言葉に反対するわけではありません。しかし、これもあまり指摘されないことですが、こうした言葉には「ある程度の水準をキープして売れ続けることは難しい」という意味が多分に含まれているわけです。

というか、「売れ続ける」を「書き続ける」と言い換えて、下世話な話をしないで済ませている場合もあるような気がします。

出版社は売れない人の本など出してくれません。商売でやってるのだから当然です（その割に商売がうまいという気は全然しませんが、それはともかく）。そして、コンスタントに本を出していない人のことを（現役の）小説家とはなかなか言わないのです。

「商業出版」と「自費出版」、あるいは「商業映画」と「自主映画」。

こうした言葉の使い分けが、なぜ広く一般にしっかり理解されていないのかというと、答えは多分簡単で、「受け手にはそんなの関係ない」からでしょう。いちいち「これは商業出版されたものだ」とか「ああ、これは自費出版のやつだ」とか確かめたりしない。それに、そもそも小説にも映画にも興味がない人が大半なわけですから、そうもなります。

個々の受け手が気にするのは、（自分にとって）面白いかどうかです。

それ自体はとても健全なことです。しかしながら、「自主映画」はそれほどでもないのに、「自費出版」と聞くと非常にイメージが悪いということがあります。露骨に軽蔑されることも珍しくありません。

このイメージが悪いというのは、受け手に非常に影響します。

作り手側からすると、「自主映画」にしろ「自費出版」にしろ、「自分（たち）で費用を出して作りたいものを作ってる」という事情は一緒です。

それが受け手にとっては、「自主映画」にあっては「予算がなくてちょっと作りが甘かったりするのね」程度で済んでしまうものが、「自費出版」にあっては「本なんか出して何様のつもりなんだよ、どうせろくでもない代物だろうに自己顕示欲だけでやるのもたいがいにしてくれよ、自費出版なんか金さえあれば誰でもできるんだろ、あーやだやだ」くらいの感じになってしまう場合が多々あります。

こうした先入観を持たれてしまっては、中身を素直に判断してもらうことは難しくなります。何もなければ、（自分にとって）面白いかどうかしか気にしない個々の受け手が、それが自費出版だと知ると「えー」となって敬遠したりバカにしたりする。偏見を持ってしまうわけです。

だから、時と場合によって、そうならないように出版事情についてつまらない詮索をさせないようにしたり、受け手の方で気を利かせてあえて詮索しないようにしたり、面倒くさくも話がねじれることがあったりするのです。

こと小説においては、何らかの権威に認められたものでなければならないというような一般理解がどこかにあるようです。ある人が「作家だ」なんて聞くと、構えてしまう人がいかに多いことか。

これはおそらく、出版とか活字というものがそもそも権威と非常に関わりが深いという理由があると思うのですが、これを述べるのは私の手に余ります。

人の言葉を借りますが、私なんかは、たかが小説じゃないか、と思います。

別に面白ければそれでいいじゃんとか、面白くも何ともないのに何小難しいこと言ってんだよとか、そういう感覚はけっこう大事だと思うのです。

小説においては、面白さのあまりわあっと気持ちが高揚するようなことはなかなか起こりにくいのもまた本当かもしれませんが、でも、こういう当たり前の判断がすぐに忘れられてしまう。どこかに知だとか権威だとかの目があるような気になって、単なる一個人の主観でうっかりしたことを言うとバカにされるんじゃないかみたいに受け手を委縮させてしまうところが、小説というジャンルにはあるようなのです。

このことが、出版するものについても「きちんとしていること」が前提であるかのようになっているという部分に現れてきます。

それで、私の書いたある種のコメディ的なものなんかを見て、「ふざけてるのか」とか「ウソばかり書くな」とかピント外れの怒り方をしたりする人がかなりの割合でいるということになるのです。もちろん、こちらを下に見てそういうことを言うわけですけど、頭が固いというかなんというか。

とはいえ、一般的にそう理解されてしまっているものを覆すというのも不可能に近い話です。書き手や出版する側にしてからが「小説というのはえらい（そして、それを書く作家というのもえらい）」という意識をどこかで、人によっては堂々と、持ってしまっているのですから、尚更です。

そういう一般理解と書き手や出版側の意識が結びついていた時代もあったのかもしれませんが、今現在の状況を「小説というのはえらい（カッコ内は省略）」という観点から眺めることなどできるでしょうか。そんなの冗談にもなってないというところでしょう。

私なんかは、もうちょっと自分の足元見たらどうなのと思います。

小説というのは、ダサくて時代遅れなものです。

それが当たっているかどうかはともかく、そう言ってしまった方がいいようなものだと私は思ってます。

前出の編集者が自ら言った小説は今やマイナーだというのは当たってると思います。もちろん小説はえらくもない（カッコ内は省略）。ですが、その認識と、出版する側がやってることが噛み合ってるかどうかとなると、それは分かりません。

というのは「マイナーなんていやだ、えらくないなんていやだ」という気持ちがそこには隠されてないのかということです。まぁ、「もとからマイナーだった」のではなく「凋落してそうなった」のだとするなら、殿様商売のまま凝り固まってしまうのも分からないではないのですが。

個人的にはつまらないものはなくなればいい、それが運命というか世の常というものでしょう

くらいにしか思いません。
　私は別に、小説本なんてなくなればいいと言ってるわけではありません、それは今後も存在するでしょうし、読む人は読むでしょう。問題は、私が今、そしてこれから、小説を書こうとしている人間であり、自分なりに、できる限り面白いものを書きたいと思っていることです。そして、それを今のこの状況の中で、どのように発表するかということも含めて、どうにかしてやらざるをえないということです。
　本の内容と全然関係ないことをだらだら書いているようですが、この『足のうら怪談』シリーズについては自費で制作したもの、つまり一種の自費出版です。ここまでのだらだらは、こういうことに実際に手を染めれば考えざるをえないことでもあるのです。
　個人でできる限界というのはやはりあるので、商業ベースのものの方が内容も体裁もしっかりしているということは基本的にはいえることになるでしょう。それでも商業出版なのか自費出版なのかは、内容や面白さの程度によって区別されるものではないという前提は押さえておきたいのです。
　映画のようにいずれにしろ共同作業を免れえないものだとまた話は違うかもしれませんが、小説のように本体の内容は基本的にすべて一人が手がけるものの場合、商業ベースでやるよりむしろ自分本位でやる方がうまくいくケースもあるのではないか。
　それに、私のようにマイナーな感性の書き手にとって、そうでもしないと現状では出版ということ自体ができない。それができなければ、書いたものが人の目に触れるという機会自体が訪れない。
　いつか出版界の景気が回復して、自分のような変なものを書く書き手も滑り込む余地ができるだろうなどと、呑気なことを言ってるわけにはいかないのです。
　自分の書いたものが一部の人にしかウケないというのは分かってますが、それでも一人二人の知り合いと公募の下読みの人だけでなく、より多くの人に読んでもらいたいという気持ちは当然持っています。
　書いても書いても発表する機会がないという状態は、やはりストレスです。
　下手でつまらないからだというなら、当然自分が悪い。しかし、一定レベルに達していると思われるのに商業出版のチャンスだけがないとするなら、どうしたらいいのか。
　一定のレベルに達してるとか、そんなの自己申告だろうという嘲笑的な意見だって飛んでくるでしょう。ですが、商業出版されたものがその中身で誰も彼もを納得させられるわけではないということもあります。それに、一九九七年以降十七年にもわたって業績を立て直すことができない業界側の判断がいったいどれだけ妥当といえるのかという話だって、当然あるはずです。
　さすがに閉塞感に満ち満ちた不況業界だけあって、考えても袋小路に入り込んでしまうだけというところがあります。しかし、私としては自費出版ってなぁという後ろ暗い思いを持つことなしに、前向きにやりたい。そのためには色々と状況を整理することが必要で、それがこのぐだぐだだったりもします。
　商業出版なのか自費出版なのか、どっちにしろ制作事情は厳しい。
　お金があれば自費出版はいくらか楽でしょうが、私は夏の初めにちらっと見たのを最後に一万

円札を見た覚えがないというほど貧しいのです（この部分を書いている現在、十月下旬です）。
　どっちでやるにしても大変だよということです。
　そんな話を聞きたくてあとがきを読んでるんじゃないとお思いかもしれませんが、私だってこういう話を書こうとしてあとがきを書きはじめたわけじゃありません。だいたい、ページ数が増えるほど印刷代は高くなるわけですから。
　収録されているすべての作品より、あとがきの方が長くなってしまうという異例の事態が勃発しているのでそろそろいい加減にやめますが、こういうことをきちんと書こうとするとやはり本一冊分くらいの分量が必要ということになりそうです。一冊必要ということは、結局三冊必要ということで、それだけ膨大なものが裏にはあるということです。
　それで、別に結論も何もないのですが、自費出版にしろ何にしろ、やるならば面白いものを作りたいということです。
　あまりにも当たり前すぎてバカみたいなことを言ってるようですが、前述したようにこれを常に念頭に置いておくというのは、自分一人でやる場合でさえ案外難しいことだったりするので、宣言しておいて無駄ということもないでしょう。
　面白いものを作りたいと思ってできたものがこれなのか、ふーん、というところかもしれませんが、中身については読んでいただいた個々の方に判断していただくしかありません。
　ただ、こう、何度も繰り返すのもお聞き苦しいかとは思いますが、厳しいんだよ、大変なんだよということがありますので、もし仮に「まぁ言うだけのことはあったかな」と感じていただけたりだとか、どれか特に気に入っていただけた作品があったりした場合などには、お友達であるとかネット上であるとかに、こう、ちょっとだけ猛プッシュ気味な感想であるとか宣伝であるとかといった、何かそのようなものをうまい具合にしていただけないものかと思ったりする今日この頃なのであります。「なんかあとがきが長ぇーんだよ」とか、そんな程度でも。
　というわけで、ようやく前置きが終わりです。まったく、コンパクトにまとめるためにここまでだけで何回稿を重ねたことか。
　以下、いくつか説明が必要な部分について書きますが、その前にまず、『魚の目』と『土踏まず』のあとがきをここに再録しようと思います。これはこれで捨てがたいものがありますので。
　まず、『魚の目』のあとがきです。

　ここに収録した全十四作の短編は、もともとあるネット投稿型の公募のために書いたものです。「ビーケーワン怪談大賞」と「みちのく怪談コンテスト」というものです。
　どちらも八〇〇字という字数制限があり、一人三作まで応募することができる公募です。ビーケーワン怪談大賞には、過去に二度応募しています。今年はじまったばかりのみちのく怪談コンテストは、もちろん初投稿です。というわけで、十四作のうち九作がそれらの公募に投稿した作品になります。他の短編は、応募のために書いたものの、その時点では没にした作品です。執筆時期は、二〇〇九年の夏と二〇一〇年の夏になります（「カラスの住処」だけは別の短編公募に出したもので、二〇〇八年秋頃の作です）。

今回短編集を作るにあたっては、それらをただ一つにまとめただけではありません。公募に投稿しなかったものも含めて、この十一月にすべて手直ししました。細かく変わっているものもあれば、大幅に加筆して二倍三倍に膨れ上がっているものもあります。八〇〇字という字数制限はここでは取り払いました。

ところで、短編集のタイトルに「怪談」とは掲げていますが、全十四作のうち半数を超える八作が、どう言うのが適当か、コミカルなアプローチを取っています（あまり適当な言い方だという気もしませんが……）。

その手のものは好きではないという意見は多々ありましょうが、私としては、そうした言わば「コミカルな怪談」がありえないとは思いません。もともと、恐怖と笑いは紙一重というのはよく言うことですし、ホラーを銘打っていながら笑える作品は、例えば漫画や映画にはいくつか見つけられると思います（小説では、実はよく知りませんが）。中には、怖さを狙ってるにもかかわらず、ギャグになってしまっているという場合もあるでしょう。

それでもとにかくその手のものは好きじゃない、と言うなら、それは仕方ないねというだけの話です。よく分からない、も同様。非常に不思議なのですが、コミカルなものは、それがただコミカルであるというだけで、非難の対象になるようなのです。それも、なぜか「積極的に、熱心に」非難される場合が多いです。

出来としてどうなのかという話ならともかく、コミカルであるということ自体を非難されても、私としても対処に困ります（要するにそういう非難は実によく受けるわけです）。どうもコミカルという言葉は使わない方がよかった気がしますが。

なお、「足のうら怪談」という短編集のタイトルは、ビーケーワン怪談大賞の受賞作などをまとめた本「てのひら怪談」をもじったものです。

また、応募したもとの八〇〇字の作品は、それぞれの公募のブログで現在も読むことができます。「庵堂ちふう」もしくは「庵堂知風」という名前で書いています。

続けて、『土踏まず』のあとがきです。

ここに収録した一八編の短編は、ネット投稿型の公募である『第９回ビーケーワン怪談大賞』、『第２回みちのく怪談コンテスト』、『本所深川てのひら怪談コンテスト』に投稿した作品と、それらの公募に投稿しようと書いたものの、長さやテイストや投稿数制限などの関係からボツにしたものになります。ほぼすべて改稿しています。

二〇一〇年秋に、やはり同系列の怪談公募に投稿した作品と未発表のものを集めて『足のうら怪談　魚の目』という短編集を編みましたが、これはその続編になります。「足のうら」というのが何かという説明は、面倒なのでやめます。

さて、これら短編を投稿した公募は、いずれも「八〇〇字の怪談」をテーマとして謳っているものになるわけですが、個人的には、「怪談」ということよりむしろ「八〇〇字」という短さに惹かれています。

仕上げるのに数週間から数ヶ月かかってしまうような長編だと、思いついたそばから何でも書

いてしまうというようなやり方はなかなかできませんが、この短さだとそれも可能になります。というので、個人的には「色々なアイデアを試してみる、色々なタイプのものを書いてみる」くらいのつもりでやっています。

中編や長編も書きたいので、年中こうした短編や掌握をやっているわけにもいきませんが、たまには書きたくなる長さ、短さです。それで色々なタイプのものを書いて、手軽に、楽しく読んでもらえたら嬉しいという、そんなところです。

それでも怪談は怪談なわけで、自分なりにそういう意識で書きますが、ときどき、これは怪談というよりコントとでも言った方が当たってるんじゃないかという様相を呈すことがあります、などと言うのも白々しい、当然私は意図的にそういう方向を狙っています。

その手のものを読んで「これのどこが怪談か」と目くじらを立てる人だっているかもしれません。私はよく目くじらを立てられます。しかし、少なくとも公募上においては、そしたらそれはそれ、落選になればいいという、それだけのことです。

こちらとしては「色々なタイプのものを書いてみる」ですから、そういうものもある、そうじゃないものもある、です。それらしい怪談はいずれにせよ他の人がちゃんと書くでしょうから、それでいいじゃないですか。

というわけで、こちらは勝手に我が道を行くとなります。（だからといって、自分の書いたものがどう扱われても文句はないというわけではありませんが。それどころか、私は「これが分かられないなんて変だ」といつも怒っているわけですが）

私には「これこそ自分に合っていると思えるジャンルや公募」が、どうにもこうにもありません。これはけっこう大問題なんですが、まぁ私の事情など知ったことではないでしょうし、今ここで突っ込んでは考えません。

今言いたいのは、例えばもし、「八〇〇字のＳＦ」とか「八〇〇字のミステリー」とか「八〇〇字の恋愛文学」とか「八〇〇字の青春小説」とか、そういうものがあったとしたら、私は案外嬉々として書いているかもしれないということです。五枚とか十枚でもいいんですが。

あるいは、単に「十枚から二十枚程度の短編小説」というのでもいいんですが、ジャンルだけでも規定されていると、考えるとっかかりになるというのはあるかもしれません。

それでだから、何が言いたいかというと、私は短い作品を書くのがけっこう好きだという、それだけのことです。

しかし、短編というのはけっこう扱いに困るものらしいです。五〇枚にも満たない短編になると公募も数が知れてますし、出版社が短編集を出しても売れないんだそうです。どうせ長編だって売れないんでしょうに、と思うんですが違うんでしょうか。

ですがまぁ、短いものを読むのが好きな人とか、別に長さにはこだわらないという人とか、もっと言えばジャンルにもこだわらないという人だって、いるだろうと思うのです。

というわけで、『全』のあとがきに戻ってきました。

お気づきのことと思いますが、『メラノーマ』のあとがきというのはありません。まず、その説明からしようと思います。

この冊子は足のうら怪談の『魚の目』『土踏まず』『メラノーマ』の三冊をまとめたものだと言いましたが、三冊目にあたる『メラノーマ』は実は制作されていません。『メラノーマ』については原稿データだけがあって、単体で冊子の形にはしていないということです。

理由は単純で身も蓋もないものです。『メラノーマ』と『全』を別々に作ったら制作費がかさんでしまうからです。

中身はそっくりそのまま『全』に組み込むのだから、単体で作ることはないだろうということです。苦渋の末の決断です。苦渋って、まぁ別に作らなくてもいいかくらいのことですけど。

ただ、今まで『魚の目』と『土踏まず』の両方をご購入していただいた、私こと庵堂ちふうおよび十佐間つくお（その他名前いろいろ）を愛してやまない全国三万五千のコアなファンの方々には申し訳なく思ってます。その方々には『メラノーマ』が単体であれば事足りるわけですから。いや、『メラノーマ』と『全』とコンプリートしたいんだよ！　という激しくも熱い思いをお持ちでしょうから。

私が至らないばっかりにそのファン熱を満たして差し上げることができない。本当に申し訳ない！　どうか事情を察していただき、今後とも末永いお付き合いをどうかよろしくお願いしたいと思うのであります。

ともかく、そのようなどうにもならない事情から『メラノーマ』は幻の冊子ということになります。と何か価値が高まる気がするようなことも言ってみたりして。

その幻の冊子『メラノーマ』について、何点か述べます。

表題のメラノーマ（悪性黒色腫）というのは、皮膚、眼窩内組織、口腔粘膜上皮などに発生するメラノサイト由来の悪性腫瘍のことで、主な発生部位として「足のうら」が挙げられます。一見ほくろのような見た目をしてますが皮膚癌なのです。

怖いですねぇ、恐ろしいですねぇということで、サブタイトルにしました。

また、そのメラノーマ自体もそうですが、「ま行」のタイトルが多いというのも『メラノーマ』の特徴です。目次でご確認ください。怪奇っ！　です。

『メラノーマ』に収録されている各作品について簡単に触れます。

「森の中で」、「pop.0001」、「みちのくストリップ・ティーズ」の三本は第三回みちのく怪談コンテストに応募したものです。

この三作品はそれぞれ、「森の中で」が審査員の赤坂憲雄氏が選出するベスト二十に入り、「pop.0001」が同じく審査員の高橋克彦氏が選出するベスト二十に入り、「みちのくストリップティーズ」が主催である出版社の名を冠した荒蝦夷賞をいただくと、ありがたい結果が出ました。

私はこうした掌握を書くとき、よく三本ワンセットで書きます（規定で一人三作品まで投稿可能となっている公募が多いので）。そのとき、なるべくその三本をカラーなりテイストなりを変えるということを自分に課します。

このときの結果は、カラーを変えた三作品が、それぞれの審査員にある程度評価されたとできると思うのでしてやったりというところです。

ですが、見方を変えると「票が割れた（ので損をした）」とも言えて、三本カラーを変えるこ

とを重視するより「この一本！」という力作を書いてそれが大賞を受賞してくれる方が、何と言いますか、世の中に対して通りがいいというか、ずっとアピールがあると思ったりもしてしまいます。
　ありがたい結果を頂戴しておきながら、そんなことを考えさせられもしたのでした。
　掌握コンテストにはお祭り的な要素も含まれていると思いますから、色んなタイプの作品があった方がよかろうとは参加者としては思います。ですが、例えば長編の公募の場合を考えてみると、そこでは大賞を獲らなければどうにもならないというのが現実です。
　応募作が千編や二千編ある中で、上位わずか数パーセントに当たる二次選考通過作品や三次選考通過作品になったとしてもそれだけでは意味がない。基本的にトップである大賞一作だけが形になって発表されるのです。
　これは私のように変化球を狙っていくタイプの書き手には（いや、それが私なりの直球なんですけど）、何ともシビアな話であったりもするわけです。
「見える人は実在するっ！　の巻」、「みんな死ぬまで」、「持たざるものたち」の三本は第一回てのひら怪談大賞に応募したものです。
　この三本をワンセットで見たとき、八〇〇字の形にしたものはちょっとひらめきに欠ける気がして納得のいってなかったところがありました。それで今回かなり手を入れましたが、ひらめきに欠けるというのは手を入れてどうにかなるという類のものではないようです。とはいえ、没にするというほどでもまたないだろうとは思うのですが。
「エスカレーター」、「カフェラテ」、「腫れ物」の三本は未発表作です。
『魚の目』と『土踏まず』にもやはり未発表作というのはあったのですが、それらは公募用に書いたもののその時点で没にした作品ということでした。
　が、これら三本はそうではなく、公募に投稿するつもりで事前に準備してあったものです。ところが、あてにしていた公募が予定通り開催されなかった。そのため未発表となってしまった。そういう経緯のものです。その公募は延期になったまま、現在も再開の目途は立っていないようです。
　そもそもここに収録されているような掌握は、八〇〇字怪談のような公募がなかったら書かれなかったにちがいない作品です。
　二、三年前にはそのような掌握コンテストがいくつかあったのですが、最近ではめっきり見かけなくなってしまいました。これも出版不況の影響なのでしょうか。どこも継続困難な状況にあるのかもしれませんが、個人的にはぜひとも再開していただきたいところです。そしたら、私はまた性懲りもなく三作ともカラーを変えて書いてしまうような気もするのですが。
『メラノーマ』については以上です。
　さて、特別収録作品と位置づけている「ぼくの家族は、いい家族」ですが、これは全収録作中で最近作となります。『魚の目』『土踏まず』『メラノーマ』のいずれにも収録されてません。
　書いた順から言えば、ラストに置かれるはずのものですが、あえて『土踏まず』と『メラノーマ』の間に置きました。と言いますのも、読んでいただければただちに分かってしまうことなのですが、『メラノーマ』のラストを飾る「迷妄母娘」と、この「ぼくの家族は、いい家族」は

、同じモチーフを使った、似たテイスト、似た文体の作品だからです。
　二つの短編を書いた時期は一年半ほどしか離れていませんが、それが同じモチーフを用いているなどとは気がつきもせずに書いてしまいました。
　余談ですが、以前にある長編を書いたときも、それより前に書いた別の長編のことをすっかり忘れていて、同じモチーフを繰り返し使ってしまったことがあります。そのときは部分的な類似という程度のことでしたが、自ずと同じモチーフが繰り返されるなど、まるで作家のようだと思いませんか？　まぁ一人の人間の中にそこまで多くの引き出しがないという、ただそれだけの話だと思いますが。
　むしろ、作者としては、ここに収録されている各作品のテイストがばらばらなところを楽しんでいただけたらと思います。
　この『足のうら怪談』シリーズは自費で制作したものですが、庵堂ちふう名義で商業誌において活字になっているものもあります。ここにも収録されている「あわいの町」と「みちのくストリップティーズ」の二本がそうです。
　前者は第一回みちのく怪談コンテストにおいて優秀賞をいただき、『仙台学vol.10』に掲載、のちに単行本『みちのく怪談コンテスト２０１０傑作選』に収録されました。後者は第三回みちのく怪談コンテストにおいて荒蝦夷賞をいただき、『仙台学vol.15』に掲載されました。
　なお、『足のうら怪談』を編むにあたって改稿しているので、活字になったものとここに収録されているバージョンでは違っています。
　特に「みちのくストリップティーズ」は、ここに掲載されているものが完全版となります（違いを明確にするため、今回はタイトルに（long ver.）と添えました）。初稿を書いた段階ですでにこの形をしていましたが、公募に投稿するにあたって規定文字数に収めるために後半をまるごと削ったのです。
　是非！　『仙台学vol.15』も合わせてご購入いただき、読み比べてみていただければと思います。まぁこの掌握一本のためにそんなことする人はいないでしょうけど。
　さて、掌握公募がないとなかなかこの手のものを書くきっかけもなく、そうすると作品もたまらず、次の『足のうら怪談』は作れるかどうか分かりません。
　三冊というのはきりがいい気もするので、これにてシリーズ完結としてもいいのですが、まぁ先のことは先のことです。
　もし『足のうら怪談』を作ることがないとしても、また別の形でお目にかかれればと思います。すでにいろいろ準備はしておりますので。
　それでは、またそのときに。さよなら、さよなら、さよなら。

二〇一四年一一月　著者

初出一覧（どの作品をどの公募に応募したかを記します）

【足のうら怪談魚の目】

▼第７回ビーケーワン怪談大賞（２００９年６月）

お先に失礼

人類から遠く離れて

Ｘ氏の実験　　審査員加門七海によるベスト５０に選出

▼第８回ビーケーワン怪談大賞（２０１０年６月）

怪奇巨乳娘夢なら覚めないで

幽霊ＶＳプレデター

幽霊予報

▼第１回みちのく怪談コンテスト（２０１０年１１月）

あわいの町　　優秀賞

バスツアー

手斧

＊未発表

幽霊屋敷（２０１０年６月）

髭オヤジ（２０１０年６月）

校庭の木（２０１０年６月）

水（２００９年６月）

カラスの住処（２００８年秋頃）

【足のうら怪談土踏まず】

▼第９回ビーケーワン怪談大賞（２０１１年６月）

殺人怪談

我輩はゾンビである

愛犬バズ公

▼第２回みちのく怪談コンテスト（２０１１年１０月）

波間／滋春のこと

波間／深羽子のこと

波間／孟洋のこと

▼本所深川てのひら怪談コンテスト（２０１２年８月）

小名木川沿いを走る
マイ・オールド・フレイム
墓地に住む
深川江戸資料館にて
対岸の空き部屋
泥鰌掬い
深川の雪男
門前仲町駅前自転車置場奇譚
深川の文士先生

＊未発表

何が見えるの（２０１１年６月）
捕獲（２０１１年６月）
階段の死闘（２０１２年８月）

【足のうら怪談メラノーマ】

▼第１回てのひら怪談（２０１２年１２月）

持たざるものたち
見える人は実在するっ！の巻
みんな死ぬまで

▼第３回みちのく怪談コンテスト（２０１３年２月）

pop.0001　審査員高橋克彦によるベスト２０に選出
みちのくストリップティーズ　荒蝦夷賞
森の中で　審査員赤坂憲雄によるベスト２０に選出

▼『幽』怪談文学賞、短編部門（２０１３年４月）

迷妄母娘

＊未発表

カフェラテ（２０１３年７月）
エスカレーター（２０１３年７月）
腫れ物（２０１３年７月）

【特別収録作】

▼Upppi第２回ホラー小説コンテスト「ぷちほらー」（２０１４年１０月）
　　ぼくの家族は、いい家族

プロフィール

庵堂ちふう（他に十佐間つくお、左右田ぽっぷ、奥津正人などの筆名あり）

1978年、神奈川県小田原市生まれ。
慶応義塾大学商学部中退、元脚本家。
日本コメディ協会会員。

2010年、世田谷区芸術アワード飛翔文学部門と世田谷文学賞をW受賞。
　　第一回みちのく怪談コンテスト優秀賞を受賞。
　　→『みちのく怪談コンテスト2010傑作選』（荒蝦夷）に収録。
2011年、小説集『余裕の暮らし』（せたがや文化財団／創英社）を出版。
2013年、第三回みちのく怪談コンテスト荒蝦夷賞を受賞。
　　→『仙台学vol.15』（荒蝦夷）に収録。
2015年、掌編集『足のうら怪談 全』（outrageous novels）を出版。

他に、趣味で作ったギター独奏集『all mistakes!!』(2012)、『No,I can`t!!』(2013)、『I quit!!』(2015)がある。美術作品の制作も手がける。

公式ブログoutrageous novels　→　http://tsukuo.blog.shinobi.jp